
BASARAなのは ~魔法戦国物語~

Minosawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BASARAなのは ～魔法戦国物語～

【Nコード】

N4273N

【作者名】

Minosawa

【あらすじ】

～時は戦国 突然不思議な光に包まれた4人の戦国武将達 伊達政宗・片倉小十郎・真田幸村・猿飛佐助4人がやってきた世界はリカルなのはの世界だった!!
なのは側には真田幸村・猿飛佐助 フェイト側には伊達政宗・片倉小十郎が、ジユエルシードを巡り
大決闘

幸村の炎が、政宗の雷がなのはの世界で大激突!!

笑いあり涙ありバトルありLOVEあり?のストーリーが今、幕を
上げる

BASARAなのは 魔法戦国物語 L e t ' s P a r

t y ! !

作家、赤夜叉先生のネタを少しながら使っています。

先生の許可も取っています。

第一章 始まりの光（前書き）

未熟者ですが、よろしく願いします。

第一章 始まりの光

みなさんはじめまして、私はこの小説を書き頑張っています。皆様応援とコメントよろしくお願いします。

原作とは違う事もあり、キャラ崩壊がありますので注意してください。

時は戦国、奥州筆頭独眼竜 伊達政宗と竜の右目の片倉小十郎が奥州に戻るうとしていた時だった。

「Ha、今日も楽な戦だったぜ。」政宗は馬を走らせながら言った。「政宗様、今回の戦も後ろが隙だらけでしたぞ」と政宗の横に馬に乗っている小十郎が言った。「ハア、やれやれいつもの小言は勘弁だ、それに勝ち戦だっていうのに気分がDownだぜ・・・」とため息をつきながら言った。とその時、馬が突然止まった。「ん、どうした」馬が向いている視線に政宗が見るとそこには小さい碧色の宝石を見つけた。「ヒュ、綺麗な石だな。」「政宗様、何を拾ったのですか。」「小十郎が心配して政宗に近ずくと、突然石が光り出した。「What!？何だこの光は！小十郎」「政宗様」そして光が消えると二人の姿はなかった。

一方

武田信玄に仕える勇猛果敢な若武者真田幸村はとある戦場で一人多数の敵と戦っていた。

「うおおおおりああ大車輪」真田幸村がものすごい槍術で敵兵をなぎ払っていた。「何してやがる、相手は一人だぞ。数で相手しろ」と敵総大将が言う、「後ろがガラ空きだぜ」と背後から声がした。「何いつの間・・・ぐは」と敵総大将は倒れた。「ふう、仕事お終い、旦那終わったぜ」迷彩柄の忍装束に身を包んだ男は両手に持ってい

た大型手裏剣をしまいながら言った。この男は猿飛佐助。真田十勇士の一人であり真田忍隊の長である。「よくやった佐助、さすが真田忍隊の長だ」幸村は大声で佐助に言った。「へへありがと旦那って何だあれ」佐助が小さい碧色の宝石を拾った「どうした佐助」心配してきた幸村が佐助に近づく、突然石が光り出した。「うわ、何事でござるか?」「おいおいおいますくネ!旦那あ」「佐助ええ」光が消えると二人の姿はなかった。

第一章 始まりの光（後書き）

初投稿です。不慣れなところもありますが頑張ります。
次回彼らが来た場所は見知らぬところでありついに・・・

第二章 出会い（前書き）

前書き 第二章に突入！ 皆様に愛されるよう頑張っていきます。

第二章 出会い

「うっ何ださっきの光は、しかしここはどこだ。オレはさっきまで森にいたはず・・・」

政宗が来た場所は見知らぬ場所だった。

「政宗様！大丈夫でございますか？」

政宗が声があるほうをみると小十郎がいた。

「小十郎！無事か！」

「自分は大丈夫です。政宗様ここは一体？」

「さあな、俺もここがどこかわからねえ。まったく何なんだ一体」

「アルフ、あの二人誰だろう。」

突然、ビルの屋上に現れた政宗と小十郎を空から見下ろしながら金髪の少女が隣にいる頭の上に耳がある「アルフ」という人物に話し掛ける。

「さあ？管理局の魔導師……なのかな？」

アルフは首を傾げた。

「…何かおかしな恰好してるね。管理局の魔導師には見えない」
二人は政宗と小十郎の恰好を見た。見た目からして魔導師には見えない。バリアジャケットを着てないし、杖も持ってない。

「どうするフェイト？」

「フェイト」と呼ばれた金髪の少女は手に持つ杖を強く握った。

「捕まえよう。あの二人には悪いけど」

「わかった。次元転移による魔力は二人とも全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」

「うん。アルフもね」

アルフにそう返して、フェイトは手に持つてる杖『バルディッシュ』を起動させる。

「私が初撃で二人を誘導するから、アルフは捕縛用のバインドで二人を捕まえて」

「了解！」

政宗と小十郎は屋上の真ん中辺りに座り込んでた。

「Oh, shit!ここがどこかもわからなねーし、まったくどうする小十郎」

政宗は少しイラだちながら小十郎に問いかけた。

「政宗様、まずはここがどこか、人がいるかどうか捜しましょう。」

小十郎は悩みながら政宗の問いかけに答えた。

「そうだな」

フェイトとアルフが上空から二人に迫った。

(ごめんなさい)

心の中で謝りながらフェイトは政宗と小十郎に向かって数発の黄色い魔力弾を放った。

「政宗様!!!」

「!!!」

先に小十郎が魔力弾に気づき、政宗もその後に気付いた。そして二人は腰に差している刀を抜き素早く振って自身に迫る魔力弾を全て弾いた。

「えっ!?!」

魔力弾を放ったフェイトは驚いた。

「たああああ!!!」

アルフが政宗に殴りかかる。すると、

「政宗様!!!」

小十郎が政宗に殴りかかるアルフに蹴りをいれた。

「っぐう」

「アルフ!!!」

フェイトが急いでアルフの元へ向かおうとすると、政宗がフェイトの、小十郎はアルフの顔の前に刀を止めた。

「STOP。俺たちはガキ二人を相手にした覚えがねえよ」

「俺たちは、いきなり知らん場所に飛ばされて来た。それだけだ」

二人は説明を終えると刀をしまった。

「大丈夫アルフ?」

「う…うん。大丈夫だよフェイト」

「お二人は管理局の人間ですか?」

バルディッシュを構えて警戒しながら政宗と小十郎に問う。

「Ah 何だそれ」

「俺たちはその管理局とやらの者じゃねえよ」

「え?」

二人の返事にフェイトは思わず警戒を緩めた。

「しかしここの国の奴等は子供にこんな露出までさせたものを着せるのか?」

フェイト達の恰好を見て政宗が不思議そうに言った。

「そっちの女は犬のかざりか?」

「飾りじゃない。本物だつてゆうか犬じゃない!あたしは狼だ!!!」

小十郎の言葉にアルフが声を上げた。

「犬も狼も似たようなもんだろ?違いがわからん。一緒にいいだろ」

「よくない!!!」

「アルフ落ち着いて!」

フェイトがアルフを落ち着かせようとする。

「あ…あの」

「ん？」

「本当に二人は管理局の人間じゃないんですか？」

「じゃあ二人は気がついたら此処にいたんですね？」

「ああ」

「そうだ」

政宗と小十郎はフェイトとアルフに事情を説明した。

「フェイト。この二人『次元漂流者』かもしれないね」

「『次元漂流者』？」

アルフの言葉に二人は首をかしげた。

「簡単に言えば迷子です。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人間の事です」

とフェイトが答えた。

「…おいおい迷子かよ。」

政宗はそう言い小十郎は屋上の端に行つて街を見渡した。

「政宗様、我らの知らぬ建物がいくつもあります」

建物の形などが奥州の建物と少し違つし、それに街を歩いてる人をよく見ると皆見知らぬ服を着て歩いている。

「なあMAP持ってねーか？」

「地図？」

「ああ」

言われてフェイトは二人に地図を渡した。二人は渡された地図を見

ると、そこには知らない地名ばかりが書いてあった。

「ははは…冗談じゃないぜまったく」

「政宗様…」

「あの…大丈夫ですか？」

心配になったフェイトが二人に声をかけた。

「あ…ああ大丈夫だ」

政宗は地図をフェイトに返した。

「あの…お二人はこれからどうするんですか？」

「あ…そついやまだ考えてなかったな」

二人はは腕を組んで考える。

「あの…」

「ん？」

「私達の家でよければ泊まっていけますか？」

と、フェイトが二人に提案した。

「おい、いいのか？」

「はい。いいよねアルフ？」

フェイトは隣にいるアルフを見た。

「まあフェイトがいいならいいけどね。それにおめえら二人悪いやつには見えないし」

アルフもフェイトに同意する。

「いいのか？素性も知らねえ俺たちをそんな簡単に家に泊めても」

「はい。アルフも言ったけど、お二人は悪い人には見えませんから」

フェイトは完全に警戒を解いてバルディッシュをしまった。

「OK。なら少し世話になるうとするか。あつ、そついえば俺らま

だ自己紹介まだしてねえな」

「俺は奥州筆頭伊達政宗だよろしくな」

「俺は政宗様の忠臣片倉小十郎だ。よろしく」

「私はフェイト。フェイト・テストアロツサ」

「あたしはアルフ」

フェイト達も自己紹介する。

「よろしく頼むフェイト。アルフ」

政宗は二人に言った。

「は…はい」

フェイトは少し顔を赤くして頷いた。

「よろしく」

アルフは笑顔で返事をした。

「そうだ、二人にこの石について話してみるか」

第二章 出会い（後書き）

charleyのご感想を頂きありがとうございます。悪い点を克服するよう頑張ります。

次回 第二章 始まりの日常 へ続く

第三章 始まりの日常（前書き）

どんどん更新行きます。

第三章 始まりの日常

「へえ、ずいぶんいいところに住んでるじゃねえか」

「そうですな」

二人はフェイト達が住んでるマンションを見上げて声を上げた。この辺りで一番高い高級マンションである。

「すごいな。本当にここに住んでるのか？」

フェイトとアルフが中に入って二人も後に続く。

ちなみにアルフの狼の耳と尻尾はなくなってる。

（（耳と尻尾は隠せるのか））

「おいフェイト、あれ何だ？」

「ん…あれはエレベーターですよ。」

「エレベーター？What？一体何なんだ。乗り物か？」

政宗はエレベーターが何なのか疑問に思っていた。それもそうだ。二人がいたのは戦国時代、エレベーターの存在なんか知るわけがない。

「政宗様、とにかく乗りましょう」

「そうだな」

二人は疑問に思いながらエレベーターに乗りフェイトがボタンを押して扉が閉まり動き出すと二人は

「！小十郎動いたぞ！」

「政宗様！どんだん上に上がっていきますぞ」

「Good！いいね、最高の乗り物だ」

二人はまるで子供みたいにワイワイしている隣では、

「フェイトなんか二人ともガキみてえ」

「こら、アルフ」

政宗たちはエレベーターを出て少し歩いて部屋の前に到着した。鍵を開けて部屋の中に入る。高級マンションだけあって部屋の中は広い。ガラス張りの壁から綺麗な夜景が見える。

「Excellent!! いい眺めじゃねーか」

「ええ、まったくですな」

夜景を眺めながら二人が言った。フェイトとアルフはソファーに座る。

「しかしお前みたいなお子供がこんないい場所に住んでるとは驚きだなあ」

二人もソファーに座り、部屋を見渡した。

二人の前に座ってるアルフは小十郎の顔をじっと見てる。

「ん？何だアルフ？俺の顔に何か付いてるか？」

「いや、そうじゃないんだけど…」

「何だ？ハッキリ言ってみろ」

「じゃあ言うけど」

アルフは少し身を乗り出す。

「小十郎っていつも怖い顔してるねえ、まるでヤグザみたい」

「こらアルフ！そんなこと言っちゃダメだよ！」

慌ててフェイトが注意する。

「おいおい小十郎はこうゆうFaceしてるけど結構いいやつだぜえ」

「まったく、人を見かけで判断してるんじゃないやねえ。わかったか」
「へへい」

「ところでフェイトは一体何者なんだ？光の玉みたいなの出してよ、ビックリしたぜ」

と、政宗はフェイトに質問した。

「私は『魔導師』です」

「『魔導師？』」

聞き慣れない言葉に二人は首を傾げた。

「魔力を用いて魔法を使う人間のことを魔導師と言います」

「魔法ねえ…本当にFantasyの世界だな。空も飛んでたし」

二人は視線をフェイトからアルフに移した。

「アルフも、その魔導師というやつなのか？」

「違うよ。あたしはフェイトの『使い魔』さ」

胸を張ってアルフが答えた。

「使い魔って何だ？」

「使い魔は魔導師が使用する一種の人造生物さ」

「使い魔ねえ…何かお前ら二人まるで俺たちと似てるな」

「そうでありますな」

「あ…あの。今度は私から聞いてもいいですか？」

遠慮がちにフェイトが言う。

「ああ。いいぜ」

「二人は何者なの？」

「そうそう。フェイトの魔力弾は弾くし、あたしの攻撃も見切って

反撃したし。一体何者だい？」

二人とも魔導師でもないのに自分達の攻撃を防いだ二人に興味を持

ったようだ。

「俺らは『武士』だ」

「『武士？』」

フェイトとアルフは首を傾げた。

政宗は二人に政宗と小十郎がいた戦国時代を語った。宿敵真田幸村

の事、魔王信長の事も全て話した。

「政宗がいた時代ってスゴイねえ」
フェイトがビックリした顔で言った。

政宗はあの話をした。

「二人に見てもらいたい物がある」

「何々」

このキレイな石ところなんだが、わかるか？」

政宗はその石を出すと二人はビックリした。なぜなら

「そ、それはジュエルシード」

「Ah、何だこの石ところが、でこの石は一体なんなんだ？」

政宗がそう聞くと二人は黙り込んだ。

「まさか…それを集めると願いが叶うとかじゃねえだろうな」

政宗はそう二人に言う二人はうなずいた。

「政宗、お願いそれを私達に渡してくれないかな？」

「ああいいぜ」

「え！？」

政宗のあっさりした返事に二人は驚いた。

「俺たちはそんなもんに興味はねえよ。それにお前らの様子から見
てよっぽどの理由があるんだろう。それが俺たちの理由だ」

政宗がそう言いフェイトにジュエルシードを渡した。

「え…あ、ありがとうございます。」

「ねえフェイト。そろそろ夕食にしない？」

と、アルフが言った。

「あっ、そうだね」
フェイトが立ち上がる。

フェイトとアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ食べよつかフェイト」

「うん。いただきます」

「へえ〜うまそうだな」

「・・・ちよつと待て」

政宗がテーブルの上の夕食に手をつけようとした時小十郎が止めた。

「?どうした小十郎」

「フェイト。アルフ。これは何だ?」

小十郎はテーブルの上を見た。

「何って夕食だけ…」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

「ふざけんじゃねえー！ー」

テーブルに置かれた料理を見て小十郎は怒り始めた。あまりの突然な事に政宗はびっくりしている。

「おい小十郎落ち着けC.O.O.になれ」

「これを見て落ち着けませぬ。全部栄養が偏っております。野菜がまったくないのでぞ。

育ち盛りがこんなモンばっか食って、いいと思っているのかおまえら」

小十郎は怒りの形相で二人に怒鳴った。

「あの…えつと…ごめんなさい…」

小十郎の迫力に圧されてフェイトは戸惑いながら謝った。

「それからアルフ！！」

小十郎はアルフを指差した。

「お前は何を食おうとしてんだ！？」

「何って…」

アルフは手に持つてる箱を二人に見せる。

「ドッグフードだけど」

「「やっぱ犬じゃねえか！！」」

「違う！狼だ！」

アルフが怒鳴り返す。

「そんな物持つてる時点で説得力ねえんだよ」

「狼の自覚はあるのか？自覚は？何か悲しく見えてくるからやめろ！」

政宗はツッコミ、小十郎は頭を抱えて叫んだ。

「あゝ二人とも特に小十郎…大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

「しょうがない、拙者が何か作るか」

そう言っつて小十郎は台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

「！！！」

冷蔵庫の中を見て小十郎は絶句した。

「今度はどうしたんだい小十郎？」
「小十郎どうした？」
アルフと政宗が歩いてきた。
「冷蔵庫の中が空じゃねーかああああ！！」
再び小十郎が叫んだ。

結局、政宗達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。
「飯は明日から食材を買って、我らが作るしかないですね。」
「そうだな。」
ソファアに座って二人はため息を付く。
「なんか悪いねえお二人さん」
「俺達は部屋に泊めてもらっただ。そんぐらいはしねーとな」
「そうですね政宗様」
「ありがとうございます」
フェイトが銀時に礼を言う。
「礼なんていらねーよ」
「そうそう」
「素直じゃないね」
アルフは二人を見てニヤニヤ笑う。
「ドッグフード抜きにするぞ」
「」
政宗と小十郎は背伸びをする。

第三章 始まりの日常（後書き）

いやあー三章更新完了！

次回・・・

「待たれよオオオ」

「ぎゃああああ」

「Minosawaわわわ一体いつになったら拙者を出すんだ！」

「旦那落ち着いて気持ち分かるけど、今ここで作者ボコにしたら俺達の出番なくなるんだよ。ここは落ち着いて」

「ぬぬぬ」

「助かった！ちゃんと次回には出すから」

「本当か」

「ホントホント」

次回 ついにあの少女とあの二人が登場

第四章 青年と忍と少女 お楽しみに！

第四章 青年と忍者と少女（前書き）

前書き 第四章 始めるぜえええ

第四章 青年と忍者と少女

時は少し遡り、政宗達かがフェイト達と出会う前。

海鳴市の住宅街にある高町家。

私、高町なのはは極々平凡な小学三年生のはずだったんだけど、何の因果か運命か、魔法少女なんてやってます。

私は違う世界からやって来たユーノ君のお手伝いで『ジュエルシート』という物を集めます。

「いただきます」

今は家族のみんなと夕食を食べています。

お父さんの高町士郎、お母さんの高町桃子、お兄ちゃんの高町恭也、お姉ちゃんの高町美由希、そして私、高町なのはの五人家族なのですが。

実は今日、我が家に新しい家族…というか友達…というか居候ができました。

「桃子殿、おかわりでござる」

茶碗を持ちながら桃子に尋ねたのは長い赤鉢巻を頭に巻いて六文銭を首にさげている真田幸村。

「ちよつと旦那、もう三杯目だよ。俺達泊めてもらうんだから遠慮しないと」

注意するのは隣に座ってる忍者の猿飛佐助。

「むむ、そうであつた・・・」

「うふふ。いいのよ。遠慮しないで、どんどん食べてね」

桃子は優しく微笑んで幸村から茶碗を受け取り、ご飯を盛って幸村に渡した。

「桃子殿かたじけない」

お礼を言つて幸村はご飯を食べる。

「佐助君も遠慮しなくていいんだよ」

士郎が佐助に言った。

「あ、どうもすいません」

佐助は士郎に頭を下げた。

そんなやり取りを見ながら私は楽しく食事続けました。

どうして幸村さんと佐助さんが家にいるのかと言いますと、ジユエルシード集めから家に帰る途中に家の前で倒れてた二人を見つけたんです。起こして話を聞いてみると二人は別の世界から来た次元漂流者みたいなの。とりあえずお父さんとお母さんに二人の事を話したらしばらくの間、家に泊めてあげることになったのです。もちろん家族には二人が次元漂流者であることは秘密にしています。

夕食を終えて、私は私の部屋でユーノ君と幸村さんと佐助さんとで今後の事について話し合いました。

「幸村さんと佐助さんには申し訳ありませんが、僕の力では二人を元の世界へ帰すことはできません」

フレット姿のユーノが申し訳なさそうに幸村と佐助に言った。

「ユーノ殿気にする事はないでござる」

幸村がユーノを励ます。

「そうそう、気にする事じゃないよ」

続けて佐助も励ます。

「ありがとうございます」

ユーノは二人にお礼を言った。

「うぬ、まだ政宗殿との決着がまだだとゆうのに・・・」

幸村は天井を見ながら呟いた。

「政宗って誰ですか。」

なのはは首を傾げた。

「拙者の好敵手でござる」

「ユーノ君、好敵手って」

「ライバルの意味だよ」

「へえ〜。私も会ってみたいな」

椅子に座ってる、なのはは足をブラブラさせる。

「とりあえず今後の動きとしては、なのはと僕はジュエルシード集め。幸村さんと佐助さんは？」

ユーノがみんなに確認する。

「いや、我らもジュエルシード集めに協力するつもりでござる」

「俺達にどーんと任せな」

佐助は胸を張って言った。

「でも…ジュエルシードはとっても危険な物なんですよ？無関係の貴方達を巻き込むわけには…」

「それを言ったら無関係の、なのはちゃんを巻き込んだ時点でもうダメじゃん」

「う…」

佐助に痛い所を突かれてユーノは顔を俯いてしまう。

「あの…本当にいいんですか？」

なのはが二人に聞いた。

「もちろん！なあ旦那」

「我らとなのは殿は、もう友であり家族でもあり恩人でござる。友を助けるのに理由などいらぬ」

二人は笑顔で力強くなのはに言った。

「ありがとう。幸村さん、佐助さん」

なのはも笑顔で二人に礼を言った。

第五章 決意と突然

翌朝。

遠見市にある高級マンション。フェイト達が泊まってるマンションだ。

「フェイト。やっぱり政宗達は連れていかないのかい？」

フェイトとアルフは起きて朝食を用意している。食材はまだ買っていないので朝食もインスタント料理だ。

「うん。無関係の二人を巻き込むわけにはいかないから」

そう言っつてフェイトは視線をソファアに向けた。

ソファアには寝息を立てながら寝てる二人の姿があった。

「そうだけど…二人っつてけっこう強そうだよ？人手は一人でも多い方が……」

「ダメだよアルフ」

「う……」

フェイトに言われてアルフは諦めて席に着いた。

フェイトはソファアで寝てる銀時に近寄る。

「政宗さん、小十郎さん。朝ですよ」

フェイトが声をかける。

「ん……何だ」

「もう朝か……」

二人が起きた。

「二人で出掛ける？」

朝食を食べてる最中にフェイトが話を切り出した。

「うん」

「ジユエルシード関係か？」

食べながら小十郎はフェイトに尋ねた。

「そういえばフェイト、お前なんでそれを集めているんだ？」

政宗はフェイトに質問した。

「私の母さんが…ジユエルシードを欲しがってるから…」

「ほう…何でだ？」

次は小十郎がフェイトに質問した。

「そ、それは私にも…」

「小十郎…フェイトにも事情があるんだろう。」

「ははっ、すまんなフェイト」

「ううん、いいんです。」

フェイトが少し落ち込んでしまった。そして政宗が、

「俺達も手伝うぞ、小十郎」

「ははあ、拙者もお供いたします」

「えっ…!!」

二人の言葉にフェイトとアルフが驚いた。

「で…でも」

「そつだよジユエルシードは危険な物なんだよ！フェイトはあんたらを巻き込みたくなかったから…」

「俺達の心配ならいらねーよ。こついう Danger な事も何度も小十郎と切り抜けた。それに比べたらまだ軽いもんだ。そうたる小十郎。」

「その通りでございます。政宗様」

「だけど・・・」

「もういいじゃないかいフェイト」

アルフがため息を付いた。

「アルフ」

「本人が手伝うって言うてるんだから。それに二人は強いからきつと心強いよ」

「……………」

アルフに言われてフェイトは黙ってしまふ。

二人はフェイトの言葉を静かに待ってる。

「…政宗さん、小十郎さん」

二人を見つめてフェイトが口を開いた。

「ん？」

「何だ？」

もフェイトを見つめる。

「一人で無茶はしないって約束して」

真剣な顔でフェイトは言った。

フェイトの言葉を聞いて政宗は微笑んだ。

「そりゃ俺達のセリフだな」

「え？」

「頑固なお前の方が俺達よりよっぽど無茶しそうだぜ」

意地悪な笑みを浮かべて政宗は言った。

政宗の言葉にフェイトは顔を少し赤くする。

「まっ、約束は護るぜ」

「う…うん。なら、これからよろしく政宗さん、小十郎さん」

「政宗でいい」

「じゃ、じゃあ改めてこれからよろしく政宗、小十郎さん」

「OK」
「承知した」

朝食を食べ終え、支度を済ませた政宗達はマンションを出た。

今日はフェイトがジュエルシードの封印、アルフと政宗・小十郎が他のジュエルシードの探索。と言っても政宗と小十郎は魔法は使えないから目で見て探すしかない。それに二人はご飯の材料も買わなきゃいけないし。

「じゃあ、また後でね政宗・小十郎さん」

「じゃあね〜」

「ああ。気をつけるよ」

「またな」

マンシヨンの前で政宗達とフェイト達は別れた。

「小十郎、夕飯どうする？」

「とにかく野菜などにいたしましょう。」

海鳴市。

幸村達はなのは達と一緒に、なのはの友達の月村すずかの家に遊びに来ていた。

「おおお！大きな屋敷でござる！」

屋敷を見るなり幸村のテンシヨンは高くなる。

「旦那ハシヤギ過ぎ！」

大きな声でハシヤグ幸村を佐助が注意する。

ちなみに二人はいつもの着物ではなく白いワイシャツに黒いズボンを着ている。槍は袋に入れて手に持っている。

「あの二人がなのはの家に居候してる人達？」

金髪の少女、アリサ・バニングスがなのはに聞いた。

「うん。そっだよアリサちゃん」

「幸村さーん。佐助さーん」

なのはが二人を呼ぶ。

「ほら旦那、なのはちゃんが呼んでるよ」

「うぬ、わかった」

二人はなのは達の方へ向かった。

「紹介します。私の友達のアリサちゃんと、すずかちゃんです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

幸村達に自己紹介した。

「真田幸村と申します」

「俺は猿飛佐助。よろしく」

なのは達は庭で紅茶を飲みながら会話をしていた。フェレットのユーノは月村邸の子猫に追い掛けられていた。というより襲われていた。キューキュー鳴きながら子猫から逃げるユーノ。

佐助は笑いながらその様子を見てた。それにしても、と幸村は思うのだった。

(うぬ落ち着かないでござる・・・)

新八の周りには、なのは、アリサ、すずか、と女の子ばかりがいる。一応なのはの兄の恭也も来ているが、すずかの姉の月村忍さんの部屋に行ってしまったので、この場にいる男は幸村と佐助だけである。あ、あとユーノ。

(でもユーノ殿はフェレットだからなあ…それに今、猫に襲われてる…)

幸村は子猫に襲われてるユーノを見た。全速力で子猫の追跡を振り切り、なのはの肩に避難する。

(フェレットも大変でござるな)

幸村はユーノに同情の視線を送った。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

(ユーノ君！)

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

(うん。近くにジュエルシードがあるね)

ユーノは、なのはの肩から降りて森の中に走っていった。アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言っつて、なのは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」

「うっん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」
手を振りながらなのはが言う。

なのは達の様子に幸村と佐助は気付いた。もしかして二人はジュエルシードの反応を捉らえたのでは？

「じゃあ我らも行くぞ佐助」

「了解」

幸村と佐助は席を立った。

なのは、ユーノ、幸村、佐助の三人と一匹は森の中でジュエルシードを探していた。なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持っている。

「なのは殿。こちら辺にあるのでござるか？」

「そのハズなんだけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

「な…何だこの音!?!」

幸村達は辺りを見回す。

「皆アレ!」

佐助が何かを見つけて指差した。

「……!?!」

佐助が指差したモノを見て皆驚いた。

「にゃ〜」

皆の目の前に大きな大きな猫がいた。

「な!で、でかいでござる!?!」

幸村は驚き、佐助はあ然しているに手をかけた。

「えつと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりた』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユ一ノは苦笑いした。

「いやデカ過ぎでしょ!?!どんだけいい加減な願いの叶え方してんの!?!」

大きな猫を見上げながら佐助がツッコんだ。

「拙者初めて大きい猫に会ったでござる!」

幸村は大きな猫を見て興奮してる。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユ一ノは『広域結界』という辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ…そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだらうし……」

そう言っただけなのははレイジングハートを構えた。

直後、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃ〜!?!」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰!？」

全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女、フェイトが空中にたたずんでいた。

第五章 決意と突然（後書き）

次回、ついにバトル開始！

「そういえば二人とも紅茶っではじめて飲んだと思うけど、どうだった？」

「うむ、複雑な味でござった。」

「俺も〜」

次回 第六章 混戦、政宗の想い お楽しみに〜

第六章 混戦、政宗の想い（前書き）

幸「作者、お主は憧れの作家とかいるのでござるか」

M「ああ黒神さんとcharleyさんだね」

佐「あ、『銀魂』と『戦国BASARA』関係のひとだね」

M「そうだよ、俺は二人に認めてもらうよう頑張っていくかね」

佐「作者、黒神さんに質問送ったしよ。確か内容は・・・」

M「・・・では第六章はじまります」

佐「誤魔化した」

第六章 混戦、政宗の想い

(私と同じ魔導師…)

白いバリアジャケツトを着た女の子を見ながらフェイトは思った。

(でも…母さんのためにも…ジュエルシードは譲れない)

フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導師!？」

フェイトを見てユーノが驚く。

「ってことは狙いはジュエルシードか!？」

佐助は袋から大型手裏剣二つを取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュが鎌のような形になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは!」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

だがバルディッシュの刃が、なのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は二本の槍によって止められた。

「!!!」

攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「幸村さん!」

なのはは自分を助けてくれた青年の名を言った。

「えっ!?!」

なのはの言葉にフェイトは目を見開いた。

(幸村: ?今この子、幸村って言った?)

フェイトは動揺しながら自分の攻撃を止めた幸村を見た。

「拙者の恩人に何をするかああ!!」

叫びながら幸村はバルディッシュを弾いた

「く…!!」

フェイトは後方へ飛んだ。

「とおりアアア!!」

幸村はフェイトを追って槍をを横薙ぎに振る。

フェイトは上に飛んで槍をかわした。

すると、幸村がフェイトの格好を見て、顔を赤くした。

「お、お主なんと破廉恥な格好を。卑怯でござる」

「えっ……」

あまりにも突然な言葉にフェイトも驚いた。

「佐助さん。幸村さんって女の子嫌いななの?」

「ちがうよ。旦那はあの子の格好が苦手なの、しかも恋愛には全く

免疫ないわけ」

「へえ」

フェイトは空中に浮いたまま幸村達を見下ろす。
（接近戦は厳しい…数も向こうの方が有利…）
幸村達を見つめながら状況を分析していると。

「フェイトー！」

他のジュエルシードの探索をしていたアルフがやってきた。
今のアルフは人間の姿ではなく狼の姿になっている。

「アルフ！」

「大丈夫かいフェイト！？」

「うん」

二人は地上にいる幸村達を見た。

「他の魔導師かい？」

「うん。それに……」

フェイトは少し躊躇ってから言った。

「政宗のライバルも一緒にいるみたい」

「政宗の！？本当かい！？」

「うん」

フェイトは頷く。

「よし！あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジュエルシードを回収して！」

「でもアルフ…」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？心配いらないよ」

アルフはフェイトを安心させるように言った。

「それに政宗のライバルは死なないように足止めするよ」

「…うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

「マズイ！ジュエルシードを封印するつもりだ！止めないと…！」

ユーノが叫んだ。

「そうはさせないよ…！」

空からアルフが迫る。

「ユーノ君！」

なのはが走る。

「大丈夫だよ、なのは！」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

「ちっ！」

アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは！ジュエルシードを！」

「う…うん！」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言ったろ！」

アルフは背後から、なのはに襲い掛かる。

「なのは！！！」

ユーノが叫んで、なのは目を閉じる。

その時。

「おいワンちゃんお邪魔だよ！！！」

佐助が叫びながら、なのはとアルフの間に入って大型手裏剣で攻撃

を防いだ。

「佐助さん！！！」

なのはが叫んだ。

「佐助！？！」

なのはの言葉にアルフは驚いた。

（この忍者が政宗のライバルの手下！？）

アルフがそう考えた時。

「うおりああああ！！！」

幸村が横から槍を振ってきた。

「くっ！」

アルフは障壁を作って攻撃を防ぐ。だが幸村の力に押されて障壁

とアルフは吹き飛ばされた。

「うわああ！！！」

木にぶつかってアルフは悲鳴を上げた。
アルフは立ち上がり幸村達を見つめた。

(あの幸村って奴、なんて馬鹿力だい！？これじゃ手加減してたらこっちがやられちゃうよ！)

幸村の強さにアルフは戸惑う。

(けど、どうすれば……！)

アルフが迷った時。

「アルフ！」

フェイトが戻ってきた。

「フェイト！」

「ジュエルシールドは回収したよ。引き上げよう」

そう言っつてフェイトはアルフを連れて去って行った。

「しまった！ジュエルシールドが……！」

ユーノが慌てて走り出す。

なのは達もユーノの後を追う。

巨大猫がいた場所に着いた。そこには、さっきまで大きかった猫が元のサイズに戻って眠っていた。

「やられた……」

ジュエルシードを封印したフェイトとアルフはマンションへ向かって
いた。アルフは人間の姿に戻ってる。

(あの幸村と佐助って人…やっぱり政宗が探してる相手なのかな…
…)

フェイトは少し寂しげな表情を浮かべた。

(…やっぱり二人にはちゃんと教えなきゃ…)

フェイトがそう思った時。

「よオ」

後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

フェイトとアルフは後ろを振り返った。

「どーだ。ジュエルシードは見つかったか？」

両手に材料が入った買物袋を持った政宗と小十郎が立っていた。

マンションの近くの公園。時刻は夕方で遊んでる子供はいない。誰もいない公園のベンチに政宗達は座っていた。

「で？俺達に話して何だ？」

横に座ってるフェイトを見た。

「：今日、ジユエルシードを見つけた所で、政宗のライバルに会ったんだ」

「What!？」

「本当か!？」

フェイトの言葉に二人は驚いた。

「赤い服を着た男の子で2本の槍を持っていた。それと大きい手裏剣を持った忍者もいた」

「間違いない真田幸村だ!」

「その忍者はおそらく猿飛佐助か」

政宗と小十郎は二人の名前を言った。

「やっぱり政宗の世界の人なんだ」

「ああ。って、まさかあの二人もジュエルシールド集めてんのか！？」

「そうなのか？」

「そうみたい。一緒に魔導師もいたから」

「何やってんだあいつら……」

政宗は夕焼けの空を見上げた。

「二人とも」

「ん？」

「なんだ？」

フェイトの方を見る。

「いいんだよ。あの人達の所に行つて」

「……………」

「ちよつとの間だつたけど…政宗達といれて楽しかったよ」

「……………」

「ありがとう」

フェイトは笑顔で二人に礼を言った。

だが政宗にはその笑顔が寂しげに見えた。

「行こうアルフ」

フェイトが席を立つ。

「フェ…フェイト……」

アルフは戸惑いながらフェイトの後を歩く。

「STOP！ちよつと待て」

政宗が二人を呼び止めた。

「Jokeな事言つてんじゃねえ。」

「まったくだ」

「え？」

フェイトが振り返る。

「途中でやめるくらいなら、最初から手伝いなんかしねーよ」

「そうだ。それに俺達はまだ何もしてねえんだぞ
そう言つて二人もベンチから立ち上がる。

「政宗、小十郎さん…」

「悪いが最後まで付き合わせてもらうぜ。」

「それに料理作つてやるとも約束したしよ」

二人は材料の入つた袋を持つ。

「でも…」

「いいんだよ。あいつなら放つておいても、うまくやっけていけるさ」
言いながら二人は歩き出す。

「ほら、家に帰つて飯にするぞ」

「早く帰るぞ」

そう言つて政宗はフェイトの頭をポンツと叩いた。

フェイトは右手で自分の頭を撫でた。そして前を歩く二人の後ろ姿
を見つめた。

(……ありがとう。政宗)

二人の背中を見つめながらフェイトは微笑んだ。

おまけ

二人はスーパーの前にいた。

「おい小十郎、バーゲンってなんだ？」

「おそらく、物を安売りしていると思いますが・・・」

二人は会話をしながら入っていった。

そして買うものは全て買ってレジにいった。

「政宗様、我らこの世界の通貨は持っていますませぬぞ」

「大丈夫だよ。」

政宗は懐に入っていた。小判3枚を出した。

店員はもちろんびックリしていた。

「おい、もう行っていいのか？」

「は、はい！」

そう言って二人はレジを後にした。

第六章 混戦、政宗の想い（後書き）

M 「おいスーパーで小判使ったのかよ！」

政 「そうだが。何か悪かったか？」

M 「あたりまえだ」

政 「OK．わかったよ」

M 「まったく、今回はなんと政宗がなんとフェイトの・・・」

政 「フェイトの何だ？」

M 「次回第七章 偶然という名のお約束 お楽しみに」

政 「What？フェイトの何だよ。」

第七章 偶然という名のお約束（前書き）

政 「おいなんだフエイトの何だ」

M 「始まり始まり」

政 「誤魔化すなあああ」

M 「ぎゃああああああああ」

第七章 偶然という名のお約束

台所に小十郎が立つ。

「よし始めるか」

調理を始めようとする小十郎。政宗はフェイトとアルフと一緒にリビングにいた

「ねえ政宗」

「ん？」

「今更なんだけど…小十郎の料理って本当においしいの？」

アルフは心配そうに政宗に聞いた。

「おいおいアルフ。小十郎の料理の腕はこの奥州筆頭の俺が言うんだうまいに決まってる」

「へえ大した自信だね。楽しみだな」

夕食。

フェイトとアルフは小十郎の作った料理を食べている。食べた感想。すごくおいしい。

政宗が絶賛するほど美味しいという理由がわかる。

それでもフェイトは、初めて他人が自分達のために作ってくれた料理に感激していた。

「ごちそうさま。ありがとうございます小十郎さん。おいしかったです」

「味は普通だったけどね」

食べ終えてフェイトはお礼を言い、アルフは正直な感想を言った。

「だろ。ドッグフードよりはマシだろ？」

「うん」

アルフは腕を組んで悩んだ。

「ドッグフードの方が…」

「小十郎、明日からこいつの飯抜きだ（怒）」

「無論。そのつもりです。（怒）」

「ええ〜!？」

二人の言葉にアルフはショックを受けた。

夕食を終え、小十郎は食器を洗っている。政宗は風呂に入ろうと支度をしていた。

「おい小十郎。ちょっと風呂入ってくる」

「は。ごゆっくり」

そう言っつて政宗は風呂場に向かった。すると隣にいたアルフがある事に気づいた。

「ねえ小十郎」

「なんだ」

「まだフェイト、風呂から上がっていないけど・・・」

「何！」

政宗は風呂場に向かっていた。ぺたぺたと素足で歩いて脱衣所の前に到着。

ガララと脱衣所の扉を開けた。

中には、これから下着を着ようとしているフェイトがいた。まあ要するに裸である。

「えっ!!!?」

フェイトは顔を真っ赤にして目の前にいる政宗を見つめた。

「フェ、フェイトななな何でお前」

顔を真っ赤にしたフェイトは、バルディッシュを取り出した。

「サンダースマツシャー!!!」

バルディッシュから金色の光が放たれて、政宗は光に飲み込まれた。部屋に大きな爆発音が響いた。

「な…何だい今のは!?!」

「今の音は風呂場からだ。は、政宗様ああああ」

爆発音がした方へ向かった。脱衣所の前に到着。

そこにはフェイトの攻撃によって黒焦げになった政宗が倒れていた。

「政宗様!?!?」

小十郎は政宗に駆け寄った。

「政宗様しつかりしてください。政宗様!?!」

小十郎が必死に政宗に声をかける

「小十郎…俺は…今度生まれ変わる時は…
鳥になりてえ…なあ…へへ」

政宗はゆっくりと目を閉じた

「政宗様、逝つてはなりません。政宗様。政宗様~~~~~!?!」

そんな事はお構い無しに脱衣所の中で、フェイトは顔だけでなく耳まで真っ赤にしてドキドキしていた。

第七章 偶然という名のお約束（後書き）

政 「作者あああてめえ〜」

M 「ギヤアアアアアアア」

政 「政宗様お気を確かに」

政 「離せええ小十郎、今すぐこいつをぶつ殺す。まだ真田幸村との決着がまだなのに死んでたまるかあああ」

M 「はあ〜ゴメンゴメン次回はちゃんとやるから」

政 「Really・本当か？」

M 「ホント。次回は温泉に行きま〜ス。」

次回 第八章 温泉そして対面 お楽しみ〜

第八章 温泉・対面・混浴？（前書き）

M 「あれ皆いない。まあいなければしょうがないな。
では第八章ごゆっくりどうぞ」

第八章 温泉・対面・混浴？

一方戦国時代では・・・

「親方様、だめです。真田幸村、猿飛佐助の両者いまだに見つかりません。」

「うぬ・・・」

二人の家臣がいなくなった知らせを受けた武田信玄はあまりの突然な事に驚きを隠せなかった。

「噂では奥州筆頭独眼竜 伊達政宗、その家臣片倉小十郎も行方がわからぬそうであります。」

「奥州の小童もか。・・・」

またも突然な知らせに驚き、空を見上げる信玄。

「幸村、佐助。無事でいてくれ・・・」

一方、奥州では・・・

「筆頭――小十郎様――」
「返事してください」

奥州の方もやはり奥州筆頭伊達政宗とその家臣片倉小十郎がいなくなつては皆驚く事も無理がない。

「もしかして二人は【神隠し】にあつたのかな」

「馬鹿そんな事がある訳ないだろう。もっとくまなくさがせ」

一方、

「温泉？」

政宗と小十郎とアルフは『海鳴温泉』と書かれた旅館の前に立っている。ちなみに二人の格好はいつもの格好ではなく、政宗は青のYシャツにジーンズ。小十郎も同じジーンズだが色違いの黒いYシャツを着ている。もちろん刀は袋にしまつて持っている。

「あたしが見つけた場所がこの辺りなのさ」

そう言つてアルフは政宗と腕を組んだ。

「おいアルフ、これは何のJorkだ？」

「ねえ小十郎。あたしと政宗、恋人同士に見えるかな？」

「・・・政宗様、今から宿の者呼んでこの馬鹿犬をつまみ出すよ
う言つてまいります（怒）」

「ああ。頼む」

「あゝ！二人ともひどい！！」

二人の言葉にアルフは頬を膨らませた。

何故、政宗達が一緒にいるのかというと。

「私達にご飯を作ってくれたお礼と…その…昨夜のお詫びに温泉で
ゆつくりしてつてね」

と、フェイトに言われたからだ。

ちなみに昨夜のお詫びとは、政宗を魔法で黒焦げにしてみました事である。まあ事故とはいえ、悪いのはフェイトの裸を見た政宗なのだが。

「いや、あの時は本当に天国に昇ると思ったな」

うんうん、と頷きながら政宗はアルフと小十郎と一緒に部屋に向かった。

偶然か必然か、神のイタズラなのか幸村達も高町家と月村家と一緒に海鳴温泉に来ていた。

女湯では、なのは達が温泉に入っていた。

「いい湯だねえ」

なのはが気持ちよさそうにアリサとすずかと一緒に温泉に入ってる。

その、なのはの腕の中には、

「キューキュー！」

男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔もりんごの如く赤い。

「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって」

「可愛いわね」

アリサとすずかがユーノに触れる。

（二人とも助けて〜！！）

ユーノは念話で隣の男湯に入ってる幸村と佐助に助けを求めた。だが、魔導師でない二人に念話が届くことはなかった。

隣の男湯。

幸村と佐助と恭也は湯に浸かっていた。

「はあああいい湯でござる~~~~」

「かあああはあ~~~~本当疲れなんか吹っ飛ばんじまうくらいだ」

「そうですねえ」

3人とも頭にタオルを乗せて湯に浸かって、温泉を満喫していた。

「佐助さん、苦勞とかあるんですか」

恭也は佐助に質問した。

「そら沢山あるよ。数え切れなくらい真田の旦那に苦勞させられても~~~~」

「そ、そうですか。ハハハ・・・」

この間にも隣の女湯にいるユーノは、ずっと二人に向かって届くはずのない助けの念話を送っていた。

政宗と小十郎はしばらく部屋でゴロゴロしていた。アルフは先に温

泉に入りに行っている。

「俺達も入るぞ小十郎」

「そうですね」

政宗は立ち上がったって小十郎と一緒に部屋を出た。

温泉を指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、先に温泉から上がった、なのはとアリサ、さすがと絡んでいた。

「What? 何やってんだアイツ?」

「何やら子供に眼飛ばしていますな」

「まったく・・・」

二人はゆっくり歩き出した。

二人はまだ、なのはがジュエルシードを集めてる魔導師だということとを知らない。だからアルフが念話で、なのはに警告していることにも気付かない。

「おい、何してんだ」

政宗の声を聞いてアルフは慌てて振り返った。

「ま、政宗。こ、小十郎まで!?!」

なのは達の視線が二人に集まった。

「政…宗…?」

なのははアルフが言った男の名前を聞いて幸村達が言った事を思い出した。

(この人が、幸村さんが言っていたライバルって・・・もしかしてこの人?)

なのはは政宗をじつと見つめた。

「お前、こんな子供に何眼飛ばしてんだ。」

「別に・・・飛ばしてないよ」

動揺しながらアルフは政宗に答えた。

「すまん。うちの者が悪い事して申し訳ない」

小十郎はなのは達に謝罪した。

「は…はい…」

なのは達は頷いた。

「ほら行くぞ」

「まったく・・・」

「わっ！ちよっと待ってよ政宗！」

政宗はアルフの腕を掴んで歩き出した。

「あ…あの！」

なのはが声を上げた。

「ん？」

「何だ？」

なのはの声に政宗と小十郎は足を止めて振り返った。

「私、高町なのは。なのはって言います！よかったです…よかったら…その…貴方達二人の名前を教えてください！」

なのはは政宗と小十郎を見つめた。

「…政宗。伊達政宗だ」

「片倉小十郎だ」

そう言っ二人はアルフを連れて歩いて行った。

「伊達…政宗」

なのはは銀時の後ろ姿を見つめながら呟いた。

「お前は子供をいじめるのが趣味なのか？」

「まったく。お前にはがっかりだ」

なのは達から離れた政宗と小十郎はアルフを細目で睨んだ。

「違うよ二人とも。実は……」

アルフは二人に、なのはがジュエルシールドを集めてる魔導師である事を話した。

「Oh, Reality? フェイトと同じ年くらいじゃねーか」

「うん」

「この時代のガキは一体どうなってんだ？」

二人は何だそれというテンションになった。

「何で俺達に黙ってた？」

「……………」

「答える」

「……………」

二人の質問にアルフは黙ってしまふ。

政宗はため息を付いた。

「同じ年の女の子と戦ってる俺達が知ったら、お前から離れる
と思ったのか？」

「う…」

アルフは顔を俯かせてしまう。

「そんなに俺達の事信用できねーか？」

「そ…そんなことないよ！」

アルフは声を大きくして否定した。

政宗は短く笑った。

「安心しな。お前らを裏切るような事は俺達は絶対にしねーからよ。
なあ小十郎」

「その通りでございます」

二人にそう言われてアルフは頬を少し赤くした。

「う…うん！わかったよ政宗、小十郎！」

「さて…俺達は温泉に入るか」

「そうですね」

「あ、ちよつと小十郎」

「なんだ」

温泉に行こうとしている二人にアルフは小十郎を呼んだ。

「フェイトがちよつと小十郎に話があるって」

「フェイトが？わかった。政宗様、小十郎は行って参ります」

「Ok.わかった」

小十郎はすぐに向かった。

「さて、俺は部屋に戻「政宗！」ってなんだ」

政宗が部屋に戻ろうとするとアルフに腕を掴まれて止められた。

「一緒にお風呂入ろう」

「No.断る」

即答だった。

「ねえ…一緒に入ろうよ」

「ダメだ」

「ばらすよ、あの事」

「Ha 何をだ」

「政宗がフェイトの裸を見たって事」

「な！？テメエ。あれはAccident、事故だ」

「言おうかな？なのはってガキにも、そして幸村つて奴にも・・・」
「ぐっ・・・」

政宗は反論できない。なぜなら彼は事故であつてもフェイトの裸を見たのは事実。もしも宿敵の真田幸村の耳に入つたら・・・と思つただけでもイヤになる。

「・・・Shit。わかつたよ。一緒に入ればいいんだろ」

「そうそう素直でいいね？ま・さ・む・ね」

アルフの思つがままにされる政宗だつた。

「なんで・・・何で俺が・・・」

「そう言わないで早く入ろうよ。政宗」

アルフは体にタオルを巻いて既に入浴準備万端である。

「Ok、わかったよ」

政宗も腰にタオルを巻いて準備を整えた。

ドアを開けて浴室に入る。人は誰もいなくて貸切り状態である。

「二人つきりだね政宗」

「あんまりくつつくな」

政宗は顔を少し赤くなった状態で言った。それに気付いたアルフはニヤリと笑った。

「政宗、顔赤いよ」

「！！赤くねえ！」

「もしかして政宗、私の体見て・・・」

「Shut up!そんなわけねえ」

「ふ~~~~ん」

政宗は体を洗おうとする。

「政宗。背中洗ってあげるよ」

「そうか？悪いな」

政宗はアルフにタオルを渡した。

アルフは渡されたタオルで政宗の背中を洗う。

二人とも体を洗い終わって温泉に入った。

「ん〜いい湯だね〜」

「そうだな」

二人はゆっくりと温泉を満喫していた。

その時、ピョコツとアルフの頭から狼の耳が出た。政宗はアルフの耳に気がついた。

「おい、耳出てるぞ」

「あっ」

慌ててアルフは耳を隠した。

なのはは政宗と小十郎に会った事を温泉から上がった幸村達に話していた。

「政宗殿が!？」

なのはは話を聞いて幸村は驚きの声を上げた。

「はい」

なのはは頷いた。

「おいおい、独眼竜と右目の旦那があの子の金髪の女の子の仲間って何か？」

「わからない。けど、あの魔導師と関係があるのは間違いない」

佐助の問いにユーノが答えた。

「しかし二人はその人達と一緒にいるんだろ？」

佐助は腕を組んで考えた。

「本人の所に行くでござる!」

幸村は立ち上がった。

「ちよっ…旦那！待って」

佐助は幸村を止めた。

「離せ佐助！」

「ダメだよ旦那。ここは俺達がいた世界と違って騒ぎを起こせば大
事になる。それじゃ独眼竜だけじゃなくなのはちゃん達にも迷惑が
かかる。それじゃ決闘以前の問題だよ。」

「うっ…そうだった」

「ここは落ち着いて、ここ近くにジュエルシードがあるというこ
とはあの金髪の女の子と一緒にそれを探りに行くはずだ。わかった
？」

「うぬ…わかった」

一方、政宗がアルフと一緒に旅館の周りを歩いていた。旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で二人は探していた人物を見つけた。

木の上にフェイトが座っておりその下には小十郎がいた。

「おい小十郎、フェイト」

「あ、政宗様」

「政宗、アルフ」

「ジュエルシードは見つかったのか？」

「うん。でも封印作業は夜にやるから」

「何で今やらないんだ？」

「政宗様。今やってしまうと、周辺の者に気づかれてしまいます。」

「そうか・・・」

小十郎の説明に納得した政宗。

政宗は小十郎とアルフと一緒に旅館に向かって歩いて行った。

第八章 温泉・対面・混浴？（後書き）

M 「いや〜更新完了〜ってあれ皆？」

4人 「おめでと〜〜〜〜〜」

M 「え？何？」

佐 「作者〜例の黒神さんの質問、載ったじゃねえ〜か」

幸 「いや〜おめでと〜」

政 「しかしお前、無謀な質問してるんじゃないやねえ〜よ」

小 「まったく、黒神に感謝するんだな」

M 「ホントよかったよ〜命拾いしたし〜」

4人 「〜〜〜白い魔王？霸王？悪魔？死神？（どっちでもいいや）自分は嫌いです。って黒神のなのは（殿）に殺されなかった事時点で奇跡だ」

小 「作者今度は質問を二つにする事だそうだ」

M 「ああ〜気をつけるよ」

次回 第九章 「約束」

お楽しみに〜

小 「作者、出来るだけ黒神のなのはに無謀な質問は控える」

M 「え〜つまんないじゃ〜ん」

政 「ノンキだな〜おい」

第九章 約束（前書き）

M 「じゃあはじまるぞ」
政 「すんなりだな」

第九章 約束

政宗と小十郎とアルフは旅館をチェックアウトしてフェイトとの合流地点に向かった。結局、政宗と幸村達が旅館内で会うことはなかった。

月が輝く夜の中、三人は森の中へ駆けていった。

「おいアルフ」

政宗が隣にいるアルフに声をかけた。

「何だい政宗？」

「なのはって子は強いのか？」

「ああ、あの子かい？ 全然大した奴じゃないね。フェイトの敵じゃないよ」

「へえ」

と、政宗は返事をする。

「何だいその返事は？ 政宗と小十郎は違うのかい？」
アルフがムツとした顔で言う。

「別に。つーか俺達、魔導師の強さとかわかんねーし」

「それに油断は禁物だ。わかったか」

「はい」

そんな話をしてる内に合流地点に到着した。

「フェイト」

「アルフ、政宗に小十郎さん」

フェイトを見つけてアルフが手を振る。

フェイトも政宗達に気付いて振り返った。

「政宗。お願いがあるの」

「What? 何だ」

「ジュエルシードの封印が終わったら、その……」
フェイトがそう言うと黙り込んでしまった。

「何だフェイト、言ってみろ」

「もし、もしもだよ。政宗がそのライバルに会ったらどうするの?」

「もちろん。戦うに決まっているさ」

「それって、最後まで?」

「当たり前だろ」

「・・・」

政宗がそう言うのとまたフェイトが黙ってしまった。

「（！まさかフェイトが言いたい事はもしや）」

「?どうした小十郎」

「政宗様。フェイトが何を言いたいかこの私が言いましょう」

「!!」

小十郎がそう言うのとフェイトが顔をあげ驚いた顔をした。

「それは・・・政宗様が真田との戦いを途中で止める事でございませす」

「な!?!」

小十郎の言葉に驚いた政宗だった。そして政宗はフェイトの顔を見たがフェイトは顔をうずくまってしまう。

「・・・どういうことだ。フェイト」

「・・・」

「政宗。フェイトは・・・」

「Shut up! アルフは黙っている。俺はフェイトに聞いているんだ」

「政宗。私達の目的はジュエルシードの封印。決闘とかじゃないの、お願い・・・」

フェイトがそう言うのと政宗が黙り始めた。

「私からも頼むよ政宗」

「!!! だがな」

「政宗様、この小十郎もお願いいたします」

「小十郎? おい、何でだ!」

小十郎の言葉に驚きを隠せない政宗。

「政宗様が真田との戦いをどれだけやりたいかわかっています。し

かし今はジュエルシードを集めるのが先決です」

「……」

小十郎の言葉に再び黙ってしまった政宗。

「お願い……政宗」

「……」

フェイトが悲しい目で政宗に訴えた。

「……わかった」

「……」

「だが封印するまでの間、真田幸村と戦ってもいいんだよな？」

「うん」

「政宗様」

「よし、フェイト。ジュエルシードはどこにあるんだ？」

政宗は周りをキョロキョロ見た。

「あそこだよ」

フェイトは川を指差した。川の中から淡い光りを放っているジュエルシードがあった。

「バルディツシュ、起きて！」

「Yes sir」

フェイトの左手の手袋の甲から黄色い三角形が外れて、一振りの杖へと形を変えた。

「封印するよアルフ。サポートお願い」

「へいへい」

政宗と小十郎は二人の後ろで封印の作業を静かに見守った。封印作業が問題なく終わった時。

「あ……あれって！」

なのはとユーノがやってきた。

「あ〜らあら。やっぱり来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

「……来たか」

政宗が見た先には見慣れた男がなのはとユーノの後ろにいた。

「！！！！お、お主は」

「久しぶりだな・・・あいかわらず変わってねえな」

「伊達政宗！！」

「真田幸村！！」

ついに蒼紅揃った瞬間だった。

第九章 約束（後書き）

次回 ついに伊達と真田が激突！！

第十章 蒼紅激突

お楽しみに！

第十章 蒼紅激突（前書き）

第十章突入！ バトルシーン突入！
ではじゅっくり〜

第十章 蒼紅激突

「政宗殿おおおお何故お主がこの者と一緒にいるでござるかあ
ああ！」

「Ha!あいかわらず暑苦しい奴だぜ。誰と一緒にいても俺の勝手
だ。」

幸村の言葉に反論する政宗

「あつ！政宗さん！小十郎さん！」

政宗と小十郎を見て、なのはは声を上げた。

「それを…ジユエルシードをどうする気だ！？それは危険な代物な
んだ！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言っ
たよね？良い子にしないでないとガブツと行くよって…」

アルフは目をギロリと光らせた。

「おいおいあれのどこが親切だ？ただの眼飛ばしただ…」

と、政宗は途中で言葉を止めた。

政宗と小十郎の隣で、アルフは人の姿から狼の姿へと変身したのだ。

「な、何！！！」

「何だお前は！！！」

政宗と小十郎はアルフの姿にビククリした。

「お前変身できるのか？犬…じゃなくて狼に」

「ああ。そういえば二人にこの姿を見せるのは初めてだったね。特
に政宗、今、『犬』って言った？」

鋭い目でアルフは政宗を睨んだ。

「いや、言ったようで言っていない」

政宗はアルフの目を見て少しビクツとした様子で言った。

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う。

「使い魔？」

なのは首を傾げた。

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」
アルフが自分について説明した。

「それはいい！政宗殿その金髪の子はここにいる我の恩人なのは殿を傷つけようとした。そんな女子の味方するのでござるか！」
幸村がフェイトを指差しながら叫んだ。

フェイトは表情を暗くする。

「…そうか。まあコイツも本当はそんな事はしたくなかったはずだ。勘弁してやってくれ」

「ならば、一言侘びを入れるでござる」

フェイトに向かって幸村が言った。

フェイトは、なのはに視線を向けた。なのはもフェイトを見つめる。

そしてフェイトは静かに口を開いた。

「……ごめんね」

「う…うん」

フェイトの謝罪に、なのはは頷いて応えた。

「という訳だ…」

政宗達がフェイト達を連れて帰ろうとすると、

「い、いや待たれよ！」

幸村の叫びで政宗達は足を止めた。

「What . まだ何かあんのか。真田幸村」

「お主は、我と何もせず拙者に背を向けて帰るのでござるか…」
幸村が持っている槍を政宗に向けた。

「そうだった…忘れるところだったぜ。」

政宗は六本の刀を抜いて六爪を構えた。

「小十郎、二人を頼む」

「はっ！」

「佐助、なのは殿とユ一ノ殿を」

「任せな旦那、おもいつきりやって来な」

二人は向かい合い、武器を構えた。

「行くぞ…」

「来な…」

沈黙

そして、

「参る!!!」

「Come On!!!」

「うおりやあああ」

「Y A A A A A , h a a a a a」

二人の刃が交じり合う音が周りに響く。

「烈火あああ」

幸村が高速ともいえる速度で連続突きを政宗に突こうとするが、政宗はそれをかわし反撃に出た。

「M A G U N U M S T E P !」

高速の突きを繰り返した政宗、幸村は槍を交差して止めた。

「政宗殿！何故ジュエルシードを集めるのだ！答えよ」

「そんなにわめくな、暑苦しい奴だぜ、そんなの俺の勝手だ。おめえと一緒にだ幸村」

「そのようでごさるな」

「そうゆう事だ真田幸村、さあ続きをやるつぜ」

二人は離れ、数度打ち合った後つばぜり合いをする。

「ぬおおお…!!」

「ぐううう…!!」

ギリギリと二人は互いを押し合う。しばらくこの状態が続くと二人は後ろに跳び、距離をとる。

「おらああああ!!」

「せええいりやああ!!」

そして再び高速の剣劇は始まった。

残されたフェイト達は、二人の戦いを見て呆然となる。

なのははフェイトと向き合った。

「あ…あの…」

なのはが口を開いた。

「話し合いで何とかできないかな？」

フェイトも、なのはを真っ直ぐに見つめる。

「…私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になるね」

「だから！そんな勝手に決めない為に話し合いつて必要なんだと思う！！」

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

フェイトは目を閉じた。

「言葉だけじゃ…何も変わらない…：…伝わらない！」

そう言つてフェイトは目を開く。バルディッシュを構えてフェイトは、なのはの背後に回つた。

「くっ！」

「Flier finn」

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がつてフェイトの初撃をかわした。

「けど、だからって！」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトも、なのはを追つて空を飛ぶ。

「なのは！」

「あなたの相手はあたしだよ！」

なのはを助けようとするユーノにアルフが襲い掛ろうとした。その時、アルフの後ろに大型の手裏剣が飛んできた。

「な！！！」

アルフは辛うじて避けた。

「おいそこのワンちゃん、なのはちゃんの動物を傷付けるより自分の心配したらどう？」

アルフの後ろに大型の手裏剣を持っている佐助がいた。

「こ、こいつ…・・な！？」

アルフが後ろを見ると佐助の姿がない。

「もしもなのはちゃんを傷つけるようなマネでもしてみろ。あの金髪の嬢ちゃんとおめえの首無くなっていると思え」

「！！！！？？？？」

佐助はアルフの後ろにいて首に手裏剣の刃を向けた。佐助の言葉は冷たく冷酷な言葉だった。

「（何だよコイツ、気配も無しに後ろを！アタシよりもつ、強いかもしれない）」

その時！

「その前に、自分の背中も気を配ったほうがいいじゃねえのか？」
小十郎が佐助の背中に刀を向けた。

「小十郎！」

「アルフ！この男の相手は任せろ。お前は行け」

「わ、わかった」

小十郎の言葉にアルフは行った。

「右目の旦那、邪魔するならあんたも容赦しないよ」

「ほう、威勢は良し。さつさと来い」

二人は武器を構えた。

「猿飛佐助。いざ、忍参る」

「片倉小十郎、参る！」

フェイトと、なのはの空中戦。

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく。

「！！」

金色の閃光は桜色の閃光に掻き消された。フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

「なのは…強い！」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

「なのは！！」

ユーノが叫ぶ。

「あつ！？」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

「！！！！」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。勝負は決した。

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュ

エルシードが一つ出てきた。

「レイジングハート…何を!？」

「きつと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシードを受け取ると、地上に着地した。

「政宗を連れて帰るよ。アルフ」

「さっすが、あたしのご主人様」

アルフはフェイトの下へ戻る。

「待って!」

なのはも地上に降りる。なのはの声にフェイトは足を止めた。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きつと加減なんて出来ない」

振り向かずに、なのはにそう言った。

「名前：あなたの名前は!？」

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「わ…私は」

なのはが名前を言おうとして、フェイトは政宗達の方へ向かった。

「ばいばい」

アルフもフェイトに続いた。

「政宗：大丈夫かな？」

フェイトは少し不安な顔をする。

「だ：大丈夫だよフェイト！政宗達なら心配ないさ！
しばらく走っていると政宗達の姿を捉らえた。」

「政宗！」

フェイトとアルフは走ってた足を止めた。

「ようフェイト、終わったか・・・」

「な、何と！なのは殿は？なのは殿をどうしたお主？」

鏑迫り合いしながらフェイトに気付いた政宗は返事をし、幸村は叫ぶかのようフェイトに問い掛けた。

「大丈夫。あつちで少し休んでいるから」

「そ、そうでござるか」

幸村は槍を下ろしなのはのもとに向かう。すると幸村が足を止め政宗の方を向いた。

「政宗殿・・・次こそはかならず」

「ああ、もちろんだ」

二人は今の世界で守るべき者の元に戻った・・・

第十章 蒼紅激突（後書き）

次回 再び交じり合うフェイトとなのは・政宗と幸村。

ジュエルシードが危険な物だと確信した政宗。

彼が戦いの途中、幸村に言った事とは？

次回 第十一章 危険と説得

お楽しみに！

第十一章 危険と説得（前書き）

政 「おい作者、新しい小説書くんだって？」

M 「そうだよ」

政 「おいおい大丈夫かよ二つもやって頭耐えられるか？」

M 「大丈夫だって」

政・M 「「第十一章はじまるぜ」」

第十一章 危険と説得

夕方。

アルフは尻尾を揺らしながら、おいしそうにドッグフードを食べている。

「ん〜こっちの世界の食事もなかなか悪くないよね〜」

満足したアルフは席を立つ。

「さて、ウチの姫様はっ」と

ドッグフードを一箱持ってフェイトの部屋に向かう。

部屋に入ると、バリアジャケットを着たフェイトがベッドで横になつてる。

「ああ。また食べてない」

台の上には、あまり手を出していない食事が置かれてあつた。

「ダメだよ食べなきゃ。政宗に怒られるよ？」小十郎の作った飯が食えないのか」って

「政宗なら言いそうだね。大丈夫だよ。少しだけ食べたから」

「まあそうみただけど…」

フェイトはゆっくりと体を起こした。

その時に見えたフェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフは顔を悲痛に歪ませた。

「フェイト…二人には言わないのかい？」

「……うん。政宗達には余計な心配は掛けたくないから…」

「で…でもさフェイト。あの二人なら、あの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ」

「大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だって言ってたし」

そう言つてフェイトは立ち上がった。

「ジュエルシードの位置特定は出来てるから二人が帰ってきたら出発しよう。確か散歩だっけ？」

「う…うん……けどフェイト…あんまり無理しないでね」

「大丈夫だよ。私、強いから」
フェイトは微笑みながらアルフに言った。

マンションの近くの公園。

そこに政宗と小十郎がいた。

誰もいない公園で、政宗と小十郎は二人ベンチに座って考え込んでいた。

ジュエルシードは危険な物なんだ！

「小十郎、あのユーノって奴の言葉どう思う？」

「はい、ジュエルシードは危険な物と申しております。そういえば我らはジュエルシードが願いが叶うという事ぐらいしか知りませぬな」

「ああ、危険な物が…」

そう呟いて夕焼けの空を二人は見上げた。

二人が帰ってきた後、四人は再び海鳴市へやってきた。ちなみに政宗と小十郎はいつもの鎧を着て、アルフは狼の姿になってる。ビルの屋上に立って下を見渡す。

「おいおい。こんなゴミゴミした街中から探すのか？」
「メンドくさそーに政宗は言った。」

「ちよつと乱暴だけど、辺りに魔力流を打ち込んで強制的に発動させるよ」

「フェイトが始めようとするよ」

「ああ、ちよつと待った。それあたしがやる」
「自分がやると言ってるアルフが前に出る。」

「大丈夫？結構疲れるよ」

「あたしを一体誰の使い魔だと思いで？任せてよ」

「うん。それじゃあお願いね」

「フェイトはアルフに任せた。」

「STOP!ちよつと待ちな」

政宗が待ったをかけた。

「え？」

「フェイト。悪いけど俺達に、ジュエルシード一個見せてくんねーか？」

「ジュエルシードを？」

「ああ」

政宗の目は、いつの間にか鋭い目にならっていた。

「は…はい」

言われてフェイトはバルディッシュからジュエルシードを一つ取り出した。

政宗はジュエルシードを受け取った。

「政宗？小十郎さん？」

「……………」

フェイトの声に応えず、二人は険しい顔で、ジッとジュエルシードを睨むように見つめた。

フェイトとアルフは黙ってその様子を見てる。

「…………… Thank you. 返すぜ」

そう言つて政宗はジュエルシードをフェイトに返した。

「どうしたの二人共？」

ジュエルシードを受け取ったフェイトは首を傾げた。

「いや…なんでもねえ」

「あああ」

それっきり二人は黙ってしまった。表情は険しいままだ。

「…それじゃあいくよー！」

アルフが構える。

「はああああー！！」

アルフの足下にオレンジ色の魔法陣が展開される。それにジュエルシードが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

なのは達も同じく街でジュエルシードを探していた。

「こ…これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く…!広域結界!間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

空は暗くなり、ゴロゴロと雷が鳴る。

「おいおい?これもしかして…?何かヤバイ事になってねえか?」

「た、確かに」

政宗は汗を流しながら、少し顔を引きつらせた。

その時、街中に一本の青い光が立った。

「見つけた!」

「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

「早く片付けよ。バルディッシュ」

「Sealing form setup」
フェイトがバルディッシュを構える。

なのは達も別の場所でジュエルシードの光を確認した。

「あれはジュエルシードの光!？」

光を見ながら新八が声を上げた。

なのははレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

「封！」

「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのは達は急いでジュエルシードのある場所に向かった。

ユ一ノも走る。

「やっぱりあの二人はいるか」

政宗は二人の姿を確認する。

「二人とも。無理に戦わなくていいんだよ」

「大丈夫だ。心配すんな」

二人は腰に差してある刀を抜いた。

「…ごめんなさい。私達のせいで…」

表情を暗くしながらフェイトは二人に謝った。

「だから気にすんなって。あいつとの戦いなんていつもの事だ」

「そうだフェイト。心配するな。政宗様の事は俺に任せろ」

そう言つて二人はフェイトの頭を軽く叩いた。

「じゃ、行くぜ」

「…うん。アルフはフェレットの方をお願いね」

「はいよー!」

と、フェイトに答えた直後、銀時がアルフの背中に乗った。

「ちよつと二人とも!何勝手にあたしの背中に乗ってるんだい!？」

「しょうがねーだろ?俺達は空飛べねーんだからよ。頼むぜアルフ」

ポンポンッと軽く背中を叩きながらアルフに言った。

「しょうがないねえ。じゃあお二人さんしっかりつかまつてるんだ

よー!」

政宗と小十郎を背中に乗せてアルフはフェイトと一緒にジュエルシードへ向かう。

なのは達はジュエルシードの前に着く。そこへユーノもやってきた。

「やった!なのは、早く確保を!」

「そうはさせるかい!」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが障壁を張って防御する。

二人はアルフの背中から飛び降りた。

ユーノはアルフを引き付けて、なのは達から離れる。

「やっぱり俺様は運がいいぜ!真田幸村」

「そうでござるな!前の続きをするでござる!つと言いたいでござるが……」

「??????????」

幸村が槍を下ろし、勝負を辞退した。だがしかし政宗も刀を納めた。

「ちよつどいい、俺もアンタに話があるんだ!」

「という事はお主も!」

「そうだ」

「「ジュエルシード集めを止めて欲しい」」

政宗と幸村が言った言葉は同じだった。

「真田幸村、おめえもやつぱりあの石がやばいって事」

「政宗殿。我もそれを言おうと・・・」

「なるほどな・・・」

政宗が考える。すると佐助が、

「でもよ…仮俺らがジュエルシード集めをやめたとして…他のジュエルシードどうすんの？」

街にはまだジュエルシードが散らばってる。二人の予想が本当なら、このまま放っておくわけにはいかない。

「フェイトから聞いたが、『時空管理局』ってのがあらしい。そいつらに他のジュエルシードを任せればよい。」

『時空管理局』。

数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関。幸村も佐助もある程度の事はユーノから聞いていた。

「大体こういうメンドーな事は、そういう組織に任せりゃいいんだよ」

「でも…なのは殿…やめる止めてくれるかどうか…？」

「難しいねえ」

幸村と佐助は悩んだ。

「こっちもフェイトを説得できるか微妙だな…」

政宗は険しい表情で考える。

（俺が言っても聞かないだろうしな…もしフェイトを止められるとしたら、フェイトの母親か……）

フェイトは、なのはの後ろに回る。

「Flash move」

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「……！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

「話し合いだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけ

ど……話さないと、言葉にしないと伝わらない事だっってきたとあるよ

「！」

「……………」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

「……………」

フェイトは黙って、なのはの話を聞く。

「これが…私の理由！」

「…私は……………」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！答えなくていい！！！」

アルフがそれを止めた。

「！！！」

「優しくしてくれる人達の所で、又ク又クと甘ったれて過ごしてきたガキンちよに何も教えなくていい！！！」

アルフの言葉に政宗と小十郎は更に顔を険しくした。

（おいおい。まさかフェイトの母親と何か関係があるのか？もしそうだったら……ヤバイな）」

表情を険しくしたまま政宗は考え込む。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト！！！」

「なのは！！！」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

「大丈夫？戻ってバルディッシュ！」

「Yes, sir」

バルディツシユは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前に佇んでるジュエルシールド目掛けて走った。

「フェイト！ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシールドを掴み取る。するとジュエルシールドから強い光が放たれる。

「く…！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ…止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

「あのバカ！！」

政宗はフェイトに駆け寄った。

「こないで政宗！」

「Shut up！お前の意見は却下だ！！」

ジュエルシールドを握るフェイトの手を握った。

直後、政宗の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

「ぐあああああ！！」

政宗は悲鳴を上げた。

「政宗！」

「政宗殿！」

フェイト、幸村が政宗の名を叫んだ。すると、

「政宗様—————」

小十郎も政宗と同じジュエルシールドを握った。

「小十郎！よせ！？」

「政宗様、つぐ！この小十郎も共に……ぐああああ」

「小十郎、がああああ！！」

体に激痛を受けても二人はフェイトの手を離そうとはしなかった。

「政宗！小十郎！魔導師でもないのに、なんて無茶するんだい！！」
アルフが悲鳴に近い声を上げる。

「政宗！小十郎さん！」

フェイトが二人の名を呼ぶ。

「バ…バカヤロー…：さつさと…：封印しやがれ…！」

「と…止まれ…止まれってんだあ！」

「政宗…！小十郎さん…！くっ！止まれ、止まれ、止まれ、止まれ
！」

懇願するようにフェイトはジュエルシードを握り締める。

やがてジュエルシードの光が収まり、魔法陣も消える。

政宗と小十郎は地面に膝をついた。

「政宗！！小十郎さん！！」

フェイトは政宗の体を抱え、アルフは人型に戻って小十郎を抱えた。

「政宗！しっかりして！」

政宗と小十郎の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

「俺は大丈夫だ…それよりも」

小十郎は政宗よりも怪我が軽い為何とか自力で立った。

「…へへ…フェイト…オメーはやればできる子だと信じてた…ぜ

…」

そう言つて政宗は、ゆっくりと目を閉じて気を失った。

「政宗！」

フェイトは政宗を抱く腕に力を入れた。

「政宗様！しっかり」

「政宗さん」

「政宗殿！」

「大丈夫か、政宗の旦那」

なのは、幸村、佐助が駆け寄ろうとした。

その時、アルフは振り返って射抜くような鋭い眼で幸村達を睨みつけた。

「うぐ…！」

アルフの眼に幸村達は動きを止めた。

そしてアルフは幸村達から視線を外した。

「フェイト、政宗様は拙者が・・・」

そう言うと小十郎もフラフラし始めた。

「……おい小十郎。フェイト、二人はあたしが運ぶよ」

「うん…お願い、アルフ」

アルフは二人を抱きかかえて、フェイトと共にビルを渡りながら去っていった。

幸村達は、ただ黙ってその姿を見つめることしかできなかった。

第十一章 危険と説得（後書き）

M 「いや〜終わった、終わったってうわ！何だよ」

政 「作者！おめえのもう一つの作品を見たんだけどよ」

小 「ピンク表現出まくりだったぞおい！」

M 「いいじゃん、別」このおおおおおおバカ作者ああああ「ぎ
やああああ」

作者が幸村の拳で吹っ飛んだ。

幸 「作者！お主、何て破廉恥な物を書いたあああ」

佐 「そうそう、ある意味やバイよ〜」

M 「別に関係ないだろう普通」

四人 「よくないから言ってるんだろおおおおお」

M 「ぎゃがやがやかうあtssじゅやすっしじ、ごめkshsssd
jissu s agi」

しばらくお待ちください

M 「し、死ぬかと思った」次回はフェイトの母親、プレシアが初登場！

第十二章 接触

お楽しみに！

第十二章 接触（前書き）

作 「いやあ久しぶりの更新だあ〜」

政 「あつちの更新が多いんだよ！」

小 「しかも作者、あつちの作品が終わったら次回作、発表したそ
うじゃあねえか？」

作 「さあ始まり、始まり〜」

二人 「「無視するな！」」

第十二章 接触

フェイト達はマンションの部屋に戻った。気絶してる政宗を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当てをしている。

フェイトの方の傷は政宗が庇ったおかげで軽いもので済んだ。

同じように小十郎もフェイト同様に傷は軽いもので既に手当て済み。気絶している政宗を心配な眼差しで見ている。

「政宗様……………」

「これでよし」と

アルフが傷の手当てを終える。

「政宗……………」

フェイトはそつと政宗の手に触れた。

「ごめんなさい…私のせいで……………」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

「フェイト……………」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

「ごめんね政宗……………本当にごめんなさい……………」

俯きながらフェイトは謝った。

その時。

「おい…何、泣いて謝ってんだよ？」

声がした。

フェイトは顔を上げて政宗を見た。政宗はいつの間にか目を開けて

いてフェイト達を見ていた。

「政宗！」

「政宗様！」

「気がついたのかい！？」

「ああ」

ゆっくりと政宗は上半身を起こした。

「政宗…本当にごめんね。私のせいで…政宗と小十郎さんを危ない

目にあわせて……」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

政宗がため息をついた。

「顔上げる、フェイト」

政宗の優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

「政宗……」

「コイツは俺達の意志で動いて、できた傷だ。だからそうやって自分を責めるな！」

「そうだフェイト、言ったる？俺達はこんな事には慣れているって」

「政宗…小十郎さん……」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

「だけどな・・・フェイト」

「??？」

フェイトは顔を上げたら政宗は鬼の形相になっていた。

「フェイト。前にお前が、俺達に何て言っただか覚えてるか？」

「……………」

フェイトは政宗と小十郎に何と言っただか記憶を辿る。

「お前は俺達に”一人で無茶はするな”って言っただ」

「……………」

フェイトは顔を俯かせたまま黙って聞いている。

「ところが、一人で無茶をしたのはフェイト。お前の方だ」

「……………」

「ガキのくせに、何でも一人で背負おうとしやがって…お前は俺達が信用できないか？」

「そ…そんな事は……」

政宗の言葉にフェイトは目を泳がせてしまう。

フェイトの様子に政宗は二度目のため息をついた。

殴られると思ったフェイトは、ビクツと体を震わせて目を閉じた。

だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。ゆっくりと目を開けると、政宗はフェイトの頭に手を乗せていた。

「お前は、まだガキだ。もつと周りを頼れ。甘えても構わない。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ？」

微笑みながら政宗はフェイトに言った。

言われてフェイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

「ついでに俺達もな」

そう言つて政宗はフェイトの頭から手を離した。

「政宗…」

フェイトは政宗に顔を向けた。

「もう一人で無茶するんじゃないぞ。わかったか？」

フェイトを真つ直ぐに見ながら政宗が言う。

「…うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答に銀時は満足そうに笑つた。二人の様子を見守つてたアルフも嬉しそうに笑つて尻尾を振つてる。

「んじゃ、飯にするか」

「それでは支度して・・・」

「あつ、小十郎。その手で料理作れるのかい？」

「「あ」」

アルフに言われて小十郎は自分の手を見た。

明日には治るだろうが、包帯でグルグル巻きになつてる今の手では調理はできない。

どうしたものか、と二人が悩んでいると、

「わ…私が作るよ！」

フェイトが手を挙げて言つた。

「「え？」」

二人は目を細めた。

夕食。

テーブルの上には黒焦げになっ
てる料理が並べられていた。

全てフェイトが作った料理だ。
政宗と小十郎は目を細めてジツと黒
い料理を見つめた。さすがのアルフも
ちよつと引いている。

最初に口を開いたのは政宗だ。

「えーつと…これは何？アート？
デザイン？あつ！それとも工作？
良く出来てるなあ小十郎？」

「そうですねあ、政宗様」

「…料理です」

フェイトは少しムツとした顔で言った。

「いや、フェイトこれは料理じゃねえ。料理と言うのをバカにしてんのか？料理が得意な俺に対しての侮辱と受け取っていいのか？」
小十郎が怒り混じりに言うと、フェイトはバルディッシュを取り出した。

いつの間に直ったんだ？

「食べるよね？お二人さん？」

フェイトはニッコリ笑ってバルディッシュを構えた。

「ハイ、食べマス、いただきます…」

政宗と小十郎はとて素晴らしい笑顔で答えた。

二人は寝巻に着替えて寝る準備をしている。

フェイトの料理？食べたよ全部。味は思ったとおりマズかったけどな。

そんなこんなで政宗と小十郎の大変な一日は終わろうとしていた。

（明日はフェイトの母親か…とにかく母親に報告しに行くから、そんな時に母親を説得してフェイトのジュエルシード探しをやめさせるか……）

そんな事を考えながら政宗と小十郎がソファーで寝ようとした時、フェイトがやってきた。

「ふ、二人とも……」

「ん？何だフェイト？眠れねーのか？」

「良くないな、明日があるんだろ？」

「あの……その……」

フェイトは顔を赤くしながら、胸の前で手をモジモジさせてる。

二人は首を傾げた。

「えつと……一緒に…寝てくれる？」

「は？」

は片眉を上げた。

「おい！何Jorkな事言ってるのお前？」

「フェイト、寝ぼけてんのか？お前」

「あ…あの…今日は冷えるし…風邪引くかなって思ってた…ええつと……」

フェイトは顔をキョロキョロさせながら言う。その顔はどんどん赤くなっていく。

（顔スゲー赤いな。このままいくと何かドカ〜ンするんじゃないかな？）

顔を赤くしてるフェイトを見ながら政宗は思った。

「どうする小十郎？（コソコソ）」
「拙者に申しても…政宗様におまかせします（コソコソ）」
「…えつと…ダメかな…？」
上目遣いでフェイトが聞いてくる。
「…わかった、一緒に寝てやるよ」
政宗がそう言った瞬間、フェイトは笑顔になった。
「うん。待ってるね」
フェイトは嬉しそうに自分の部屋に向かう。
この夜、三人は一緒に部屋で寝ることになった。
ちなみに政宗と小十郎は狼姿のアルフと川の字で一緒に床で寝た。

翌日。

政宗達はマンションの屋上にいる。

「二人とも。準備はいい？」

「Ok！」

「ああ、頼む」

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しに行く。
フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親へ
のお土産だろう。

「じゃあ行くよ」

「おお」
「次元転移。次元座標。876C 4419……………」
フエイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。
「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロツサの主の所へ！」
魔法陣が強い光を発し、四人を包み込んだ。

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、四人は時の庭園に到着した。

その直後、政宗は顔を青くして、

「うっぷ!？」

政宗は気持ち悪くなり、ゲロが出そうになるが手で抑えた。

「政宗様！大丈夫でございますか!？」

「政宗!？」

「ちよつと！大丈夫政宗!？」

二人が心配そうに聞いてくる。

「な…何か気持ち悪い…」

政宗が気分を悪い理由。

それは『高次空間内』という空間が、今までいた所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れていない政宗は気分を悪くしたのだ。

「しかたない。二人は先に行ってくれ。俺は政宗様と一緒に行く」

「う…うん。わかった。」

「ゆっくり休んでな、政宗」

そう言つて二人は母親の所に向かった。
小十郎は、政宗と座り気分を落ち着かせた。

しばらくして政宗の気分は落ち着いてきた。

「ふー。やっと落ち着いたぜ」

ゆっくりと立ち上がった。

「政宗様、フェイトに部屋の場合聞くの忘れてはいませんか…」

「あ…」

政宗は軽く舌打ちをした。仕方なく小十郎と適当に中を歩くことにした。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。政宗と小十郎は歩きながらどうやってフェイトの母親を説得させるか考えた。

「小十郎、おめえはどう考える？」

「はい…フェイトの頑固が親譲りなら、説得に苦戦するのは覚悟したほうがよろしいですね」

「そうだな、ジュエルシードを欲しがってるのは母親の方だからな。さて、どう説得するか…」

二人は悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

「何やってんだアイツ？」

政宗と小十郎は首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトの姿が無い。

疑問に思った二人はアルフに近寄った。

「アルフ。こんなトコで何やってんだ？」

「フェイトはどこだ？」

二人はアルフに声をかけた。

二人の声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げて政宗と小十郎を見た。

「政宗：小十郎：」

アルフは立ち上がり、涙目になって銀時に抱き付いた。

「政宗え！！」

「おわっ！？おいアルフ！」

「どうした！急に！？」

二人は慌てながらアルフに尋ねた。

「二人とも…お願いだよ… フェイトを… フェイトを… 助けて…」
「…！」

泣きながら懇願するアルフに二人は目を細めた。

その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

「…何の音だ？」

二人は扉を睨んだ。

「フェイトが… フェイトが…」

「此処にいる」

政宗はアルフに残るように言って、扉の前に立った。

「行くぜ！小十郎！」

「承知！！」

二人は大きく息を吸い、

「うおおおりやああ!!」

叫びながら扉を蹴った。扉は開き、二人は部屋の中に入った。

「!!」

部屋に入って二人は目を見開いた。

バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れていた。

「フェイト!!」

政宗と小十郎は駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

「フェイト! おい! しっかりしろ!」

「あ……政宗……小十郎……?」

フェイトはうつすらと目を開けて二人を見た。

「いきなり扉を開けて入ってきて……貴方達、一体何者?」

前から声が聞こえた。

政宗と小十郎は顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

この時が、奥州の独眼竜と大魔導師プレシア・テストロッサが初めて対峙した瞬間だった。

第十二章 接触（後書き）

次回！政宗と小十郎が見た驚愕の事実を知る。

第十三章 フェイトの真実

お楽しみに〜

第十三章 フェイトの真実（前書き）

政 「あれ？作者は」

小 「政宗様、今日は作者不在だそうです」

政 「そうか・・・」

二人 「第十三章始まるぜ！！」「」

第十三章 フェイトの真実

「おいおいWhat?人に名を名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だろ?」

政宗の言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

「…私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサよ」

「俺は伊達政宗だ!」

「片倉小十郎、覚えてもらおうか」

小十郎はフェイトを抱いたまま立ち上がった。

「アルフ!」

政宗は大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄ってきた。

「フェイト!!」

「フェイトを連れて傷の手当てをしろ」

そう言つて小十郎はアルフにフェイトを預けた。

「う…うん。二人はどうするの?」

「俺達はあの女と話がある」

「だから行け!アルフ」

「わかつた…二人共…気をつけなよ…」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋には政宗と小十郎とプレシアの三人だけになった。

「お前、フェイトのmotherだろ?何でフェイトにあんなふざけた事をした?」

「何故?あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの五つ。この程度の成果しか上げられなかったから賤しんをしただけよ」

「賤だど!?大魔導師のアンタが娘頼みとは、まったく馬鹿げた話だ。大魔導師つてのはそんな腐った心を持った奴だったとはな」
プレシアの言葉に今度は小十郎が反論した。

「だから何?あなた達にはまったく関係ないことよ。それに、あな

た達のような弱者が関わることでもないのよ。娘に襲って何が悪いというの？」

プレシアの言葉に政宗と小十郎は怒りを燃やした。

「フェイトが… どれだけ苦しんで… 痛い思いしたか… テメエ、わかってるのか!？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

「さあ? そんなのは私の知った事じゃないわ」

「テメエ!!!」

「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が二人に向かって放たれた。

「ちっ!」

「くそ!」

二人は横に跳んで雷をかわした。

(速い!)

政宗と小十郎の素早さにプレシアは少し驚いた。

(魔力による肉体強化? 違うわ。あの男二人からは全く魔力を感じない)

プレシアは杖を政宗と小十郎に向けて再び雷を放つ。

魔法が使えない二人は避けることしかできない。

「いつまで逃げ切れるかしら!？」

プレシアの容赦のない雷が二人に迫る。

「Shit!」

「くっ!」

二人は後ろに跳び、雷は二人の前に落ちた。

後ろを向くと壁があった。

(ヤベツ! このままじゃ俺達、壁にぶつかる!)

だが政宗と小十郎は、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ。

「!!!」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

「おわっ！」

「どわっ！」

二人は床に倒れた。

「政宗様、ここは？」

「わかんねえ！隠し通路か？」

立ち上がりながら二人は隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

「なっ！？」

「これは！？」

ソレを見て政宗達は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

「：フェイト：！？」

政宗達の前に、ガラス張りの大きなケースがあった。

その中には、緑色の液体の中を漂う金髪の少女がいた。

「もう一人の：フェイト？」

「これは：一体」

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。

政宗達がケースに近づこうとした時、

「アリシアに近寄らないで！！」

「！」

プレシアの怒声と共に雷が二人を襲った。

「うわあ！」

「ちいいい！」

二人はなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

「アンタ：こいつぁどういう事だ？」

「何故フェイトが二人いる？」

二人は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

政宗と小十郎の言葉にプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「アリシア？」

「人形だと…？」

プレシアの言葉に、二人は目を細めた。

「フェイト・テストロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。」フェイト”の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

「…な…！？」

政宗と小十郎は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

二人は黙って聞いている。

「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった…いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた。

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ…！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

「くだらねえ願いだな、呆れたぜ!？」

政宗の言葉に上げていた視線を政宗達に戻した。

「娘のために、娘を生き返らせる？全然違うな！」

「……何ですって？」

政宗の言葉にプレシアは目を鋭くする。

「全部自分のためだろ？フェイトを造ったのも、アルハザードに行つて娘生き返らせようとしてんのも！」

「！？」

プレシアの目が見開かれる。

「おめえはただ、フェイトとアリシアの魂を弄んだだけだ！」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

「……黙りなさい」

「テメーは、娘が死んだ事実から逃げてるだけだ！」

「……黙れ」

の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

「今のテメーが、胸張って、その面で、アリシアに”母親”だと言えんのか！！？」

「黙りなさいって言うてるのよ！！！」

プレシアから、巨大な雷が政宗に向かって放たれた。

「ぐああああああ！！！」

雷は政宗に直撃した。

「政宗様！！！」

（避けなかった！？）

小十郎は驚き、避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる

政宗は火傷を負い、鎧兜は所々焦げて煙が出てる。肩で息をしながら政宗はプレシアを見る。

「おい…気が済んだかよ？」

「く…！うるさい！その減らず口を黙らせ…」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。

「う…ごほっ！」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

「おいっ！どうした!？」

「しっかりしろ！」

プレシアの異変に政宗と小十郎が駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

「あんた…」

「まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

「…ふふ。大魔導師でも…不治の病は治せないのよ…」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の二人を睨みつける。

「……んな事するか。俺達はあるあんたを殺すのが目的じゃねえ。

それに…」

政宗は一旦、言葉を切った。

「フェイトのヤツが悲しむ」

「……………」

プレシアは顔を俯かせた。

「政宗……」

「ん？」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

「貴方なら…雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その刀で切れたはずよ……何故そうしなかったの……？」

「だから、俺達はあるあんたを切る目的で来たんじゃないよ。」

ため息交じりで政宗が答えた。
プレシアは顔を少し俯かせる。

「…政宗…」

「What!？今度は何だ？」

「…私は……間違っていたの……？」

俯いたままプレシアは銀時に聞いた。

だが政宗はその問いには答えない。

「もし…間違っているなら……私は……私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

「…さあな」

政宗と小十郎は歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前で政宗は足を止めた。

「政宗様？」

「ただよお」

「!」

プレシアは振り返って政宗の後ろ姿を見た。

「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中どこ探しても……あんただけなんだよ！」

「!」

政宗の言葉にプレシアは目を見開いた。

「じゃあな」

二人は通路から出ていった。

一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

「アリシア……私は自分のために……貴女を弄んでいたの……？」

近寄ってケースに触れる。

「私は……どうすれば……」

プレシアは力無く床に座った。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

「フェイト……」

廊下を歩いて、フェイト達がいる部屋を目指す政宗と小十郎。

「…こいつぁプレシアを説得するのは無理かもしれねーな」

政宗は腕を組みながら悩んだ。

「たくつ。とんでもねー頑固親子ですね」

小十郎は頭を掻きながら言った。

政宗達はフェイト達がいる部屋に入った。

「政宗！小十郎！」

二人に気付いたアルフが駆け寄った。

「あんた…！どうしたんだい、その体は！？」

プレシアの雷を受けて少し火傷と少し焦げた跡がある鎧の姿の政宗を見てアルフが叫んだ。

「あれだよ…ちょっとしたケーキ作りに失敗したんだよ！なあ小十郎？」

「はい、そのとうりでございます」

「嘘つけ！あの女にやられたんだろ？」

「政宗様が大丈夫って言うんだ！それでいいだろ！」

小十郎が怒鳴り混じりに言った。

「それよりもフェイトは？」

政宗は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

「…今は落ち着いて眠ってるよ」

二人は椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

「ん…」

フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

アルフが目には涙を浮かべる。

「…アルフ…政宗…小十郎さん…」

フェイトは三人を見て小さく呟いた。

「よお」

「目が覚めたか？」

二人が声をかけた。

フェイトはボロボロになってる政宗の姿を見て驚いた。

「政宗…！その傷…どうしたの？」

「これか？」

政宗は、アルフにも言った言葉を口にした。

「ケーキ作りに失敗した」

第十三章 フェイトの真実（後書き）

次回、幸村と共闘、あの男が時空管理局と共にやって来る！！

第十四章 蒼紅共闘 割目して見よ！！

第十四章 蒼紅共闘（前書き）

ちよつと長めに書きました。
新キャラ登場です！！

第十四章 蒼紅共闘

翌日。

政宗と小十郎はフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシード集めを続けることになった。

屋上に政宗達が立ってる。

「もうすぐ発動するジュエルシードが近くにある」

夕焼けの空を見上げながらフェイトが言う。

後ろには政宗と小十郎、狼形態のアルフがいる。

（マズイな…今はまだフェイトにアリシアの事はバレないが、ジュエルシードを集めれば、いずれはバレる）

政宗は表情を険しくして考える。

（何か…何か方法は……ないか！？）

夕方。

学校からの帰り道。

なのはは幸村達と出会った。

ユーノが赤く丸い石をなのはに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

「レイジングハート。直つたんだね？よかった」

「Condition green」

レイジングハートは、なのはに答えた。

「また、一緒に頑張ってくれる？」

「All right, my master」

なのははレイジングハートを握った。

「ありがとう」

なのはの様子を見て、幸村と佐助は安心したように微笑んだ。

政宗達はジュエルシードがある場所にやってきた。海が見える公園。公園内には政宗達以外、誰もいない。公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。一本の木の中に、ジュエルシードが入っていった。木に変化が起る。

「ゴオオオオオ!!」

二本の腕が生えた巨大な木の化物になった。

「元気いいオイ。その元気を俺様にも少し分けて貰いたいねえ!」

「少しばかりありすぎです、政宗様」

木の化物を見ながら政宗と小十郎が呟いた。

「フェイト」

アルフがフェイトに声をかけた。

「うん。あの子達もいる」

フェイトは、なのは達の姿を捉らえた。

「フェイト」

今度は政宗がフェイトを呼んだ。

「何?」

「あの化物の相手は俺達がしてやつから、お前は封印だけやれ」

「え?」

政宗の提案にフェイトは戸惑った。

「でも…」

「言っただろ?」

政宗はフェイトの頭に手を乗せた。

「お前はガキなんだから、もっと周りを頼れ」

「!」

「お前はまだ若い…色々と見ておく必要もある」

政宗と小十郎は前が出る。

木の化物と対峙する政宗と小十郎。

「政宗殿!」

「あらら〜いたのお二人さん？」

政宗と小十郎の姿を見つけた幸村と佐助は声を上げた。

「まさか！彼らは二人でアレに立ち向かうつもりなのか！？無茶だ！」

ユ一ノは、政宗達の行動を無謀だと思った。

幸村と佐助は政宗達の姿を見て、目付きを変えた。

「行くぞ佐助！」

「了解！」

二人は政宗達に向かって走り出した。

「幸村さん！佐助さん！」

なのはが叫んだ。

「なのは殿は、そこにいるでござる…！」

「封印は任せたよ！」

木の化物は、目の前にいる政宗と小十郎を睨みつけている。

「ゴオオオオオオ！！！」

政宗を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。

「バケモンにしてはたいした事なさそうだな？」

「政宗様、油断は禁物ですぞ！」

そう言つて二人は、腰に差してある刀を抜いた。

その時。

「政宗殿おおおおお」

「どうも〜」

幸村と佐助がやってきた。

「よう幸村、あいかわらず暑苦しいぜ！」

政宗と小十郎は振り返つて二人を見た。幸村と佐助は政宗の後ろで足を止めた。

「政宗殿。あの時の傷は？」

「大丈夫だ！」

政宗と小十郎は後ろにいる、なのはを見つけた。

「お前ら、なのはにジュエルシード集めやめろって言つたら？」

「その事なんだけど・・・なのはちゃんの説得：だめだった」
佐助は謝りながら政宗に言った。

「そういう政宗殿は、あの二人の説得は？」

「こつちもダメだ・・・」

腕を組みながら小十郎は言った。

四人がそんな会話をしていると、

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が雄叫びを上げた。

「何だ？無視されて怒ったか？バケモノなのに寂しがり屋か？」

政宗は再び木の化物を睨みつける。

「とりあえず今は」

幸村は二本の十文字槍を構えた。

「あの化物を倒すとしますか！」

佐助も手裏剣を構える。

「ついて来いよ！真田幸村！！」

「お主こそおー！！」

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして四人目掛けて木の根を振り下ろす。

「！！！！うおおおおお！！！！！！」

四人は叫びながら木の化物目掛けて走り出した。

「CRAZY STORM！！」

電気の帯びた斬撃で木の根を切り刻む。

「大つつ車輪！！」

複数の木の根を幸村は炎の輪を作ったまま斬り、焼いた。すると、政宗と幸村の後ろに複数の木の根が襲ってきた。

すると...

「政宗様！」

「旦那！」

小十郎と佐助が後ろの複数の木の根を切った。

「政宗様！あれほど後ろを気にしろとあれほど…」

「やれやれ。いつもの小言は聞き飽きたぜ」

「旦那も熱くなりすぎ！ちゃんと周りを見て！」

「ぬうゝすまん佐助」

お互い、部下が上司に説教している。

「木の根は真田の忍びとやります！」

「お二人さんはあのバケモン本体を頼む！」

「だそうだ」

「なら、行くぞ！」

二人は前に進み始めた。

「っ…強い！」

戦いの様子を見るアルフが驚きの声を上げた。

「政宗と小十郎さん…こんなに強かったんだ…」

隣に立つてるフェイトも驚いている。二人が強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

「佐助さん…強い！」

「幸村君も凄い！」

ユーノとなのはも幸村達の実力に驚いていた。

特にユーノは魔法も使わずに、あの木の化物と戦ってる四人の力に驚愕を隠せなかった。

「一体…彼等は何者なんだ？」

「ゴオオ!?!」

政宗と幸村の気迫に、初めて木の化物は動揺した。

「Hell Dragon!!!!」

「灼熱炎鳳覇ああ!!!」

木の化物は障壁を展開したが二人の武器から放たれた鳳凰と雷球が木の化物の障壁が割れ、直撃した。

「よし!」

「どうだ!」

化物の木からジュエルシードが出てきた。

「やった!やったよフェイト!」

「うん!」

政宗の勝利にアルフとフェイトは喜んだ。

「何やってんだフェイト!さっさと封印しろ!」

「あつ!は...はい!」

小十郎に言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。

なのはもレイジングハートを構える。

「ジュエルシード、シリアルフ!」

「封印!」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

「...ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイト

ちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

「...だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

「私は...フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど...」

なのはもレイジングハートを構える。

政宗達は地上で二人の様子を見る。

「おい小十郎、まさかフェイトの奴・・・」

「ええ、そのまさかだと思えます・・・」

二人を見上げて政宗と小十郎は言う。

「まさかお二人は戦うつもりではないだろうか!？」

「ちよつと待つて! ジュエルシードの近くでか!？」

二人は叫んだ。ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

「STOP! STOPだフェイトお前そんなトコでやり合ったら、またジュエルシード暴走するぞ!!」

「そうだ! また無茶するのをお前は!」

「なのは殿! 休戦でござる! ここは一旦休戦するでござるうううう」

「そうだよ、なのはちゃん! お兄さん達の言う事聞こえてるー!」

政宗達が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

「・・・ああああ!!」

もうだめかと思つたその時

二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ!」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織つた少年がデバイスを受け止めた。

「!!!?!」

突然の乱入者に二人は驚いた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!」

地上にいる政宗達も呆然と見上げている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。ジュエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

（おいおい。ここで管理局のお出ましかよ…）
政宗は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を険しくした。

「どうします政宗様？」

小十郎が小声で政宗に話し掛ける。

「どうするって言われてもな…」

政宗は険しい表情のまま悩んだ。

フェイトと、なのはの間に立ってるクロノは交互に二人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「はっ！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。

全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！政宗！小十郎！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシールド目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。政宗達も離れる。

魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

「くそ！」

政宗は素早く一本の刀を魔力弾に向かって投げた。投げたと同時に政宗は走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾は政宗の投げた刀によって弾かれた。

「ああっ！」

フェイトは、魔力弾と刀がぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中受けて止めた。

クロノは意識をフェイト達から政宗に向けた。

「何の真似だ！？」

政宗に向かって叫びながら黒いデバイスを構える。

だが政宗はクロノには何も答えない。

「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を政宗に向かって放つ。

政宗は魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

「政宗！」

アルフが叫んだ。

政宗とクロノの距離はどんどん縮まる。

（こいつ！魔法を使ってないのに、なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノは政宗の身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃った。政宗は上に跳んで魔力弾をかわした。

（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ政宗の姿を見た。

政宗の右手には、先ほど投げたはずの刀が握られていた。

「なっ！？」

「Ah！」

政宗は、上段から刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、刀を六爪にしてクロノの顔に向けた。

「Finishだ。管理局さんよ」

言って、政宗はニヤリと笑った。

政宗が上に跳んだのは、落ちてくる刀を掴むため。

その場にいる全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユ-

ノは驚愕を隠せなかった。

「か…勝っちゃった…」

政宗の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に政宗は勝った！？しかもアツサリと！？）

木の化物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

「凄い…」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

木刀を突き付けられてるクロノは動けなかった。

「き…君達はどれだけ危険な事をしているのか分かっているのか！？」

「ガキのくせに見下した事言ってんじゃね〜よ」
刀を構えながら政宗は言った。

「だまれ！」

クロノが怒鳴った時だ。

「やめとけクロノ」

男の声がした。

「ガキのテメーじゃ独眼竜に勝つなんぞ無理だ」

クロノの後ろの林の中から一人の男が現れた。

「なっ！？」

男を見て政宗は驚愕した。

いや、政宗だけでなく小十郎と幸村、佐助も驚いていた。
頭にバンダナを巻いて、左目に紫の眼帯をして、碇のような形の槍
を持っている男

「長曾我部…元親！」

第十四章 蒼紅共闘（後書き）

西海の鬼神、長曾我部元親が登場！

そして、リンディ初登場！

次回 第十五章 時空管理局との接触

割目して見よー！

第十五章 時空管理局との接触

「どうしてお主がここに？」

「それはこつちのセリフだ！まさか独眼竜と虎の若子わこがここに
いるとは今でも信じられねえよ」

真田の質問に驚いた様子で話す元親。

「おいおい、まさか西海の鬼がここにいるとはねえ、俺もビックリ
だぜ。んで何でお前さんが何でこんなガキと一緒に？」

「俺も最初は嫌だったぜ、こんなガキと一緒には！」

「だろうな、C.O.O.Iぶってるから何か腹立つんだよ」

「お前さんにそっくりだったぜ独眼竜」

元親の言葉にカチンとした政宗。まるで言うてはいけない事を軽く
言われたかのように…

「おい！こんなクソガキと一緒にするんじゃないやね！年上に対して態度
が悪いし生意気でふざけた事言ってるじゃねえよ。西海の鬼と呼ば
れたお前さんがこんなクソガキと一緒にいるとはねえ、今度から西
海の鬼ならぬ西海の保護者になれよ！」

政宗の言葉に今度は元親がカチンときた。

「うるせえ！誰が西海の保護者だコラ！だったらここで戦つかあ
あ
ん？」

「上等だ！かかってこい！」

「君達！少しは落ち着いて…」

クロノが二人を止めようとするが、

「うるせえ！クソガキは黙ってる！！」

二人に怒鳴られてしまう。

政宗の後ろで様子を見てるアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、アルフの隣にいた小十郎が小声でこう言った。

「アルフ、今のうちにフェイトを連れて逃げる！（コソコソ）」

「えっ！？でも……」

「後のことは任せろ！政宗様も承知の上だ！行け（コソコソ）」

「うん…わかった」

アルフは心の中で二人にお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、気付かれないように静かに動いて、アルフは去っていった。

政宗と元親はまだ言い争ってた。

「お前さんもそういう趣味持っているのか？あんな子供といっ…？元親がある事に気づいた。」

「…なるほどそういう事か…おいクロノ！金髪の魔導師いねぞ〜」

元親の言葉で、全員の視線が政宗の後ろに集まった。フェイトとアルフの姿はなかった。

「しまった！」

クロノは顔を険しくした。

「独眼竜…お前さんワザと…」

「何の事だ？」

「ふん…お前さんらしいな」

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましよう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

公園。

政宗達の前にリンディの映像が現れた。

「クロノ。お疲れ様」

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線を政宗達に向けた。

「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら？」

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をする映像は消えた。

政宗達はアースラにやってきた。

「何かいろいろありだな」

「そうですね〜しかし…」

小十郎が後ろを向くと…

「一人を除いて…」

「うおおおお何と摩訶不思議な！」

「ちよつ旦那!? あんまりはしゃがない! 注意している俺様も恥ずかしいから〜」

見た事もない船に乗った幸村は子供のようにはしゃいで、佐助が顔を真っ赤になりながら止めている。

「政宗殿と小十郎殿は驚かないのでござるか?」

「空飛んで魔法出してる女子を見たら…」

「こつというのが出るのが予想ついでるからな…今さら驚かねえよ」
魔法やら使い魔やらジュエルシードなど、いろんなモノを見てきた小十郎と政宗は、もう驚きはしなかった。

先頭に立ってるクロノが、なのは達に振り返った。

「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

「え？」

なのはは首を傾げた。隣にいる幸村と佐助も同じく首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

「えっ!?!」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。隣にいる幸村と佐助もだ。

政宗と小十郎は、

「ああ」

「うむ」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

「ふええええ!!?!」

アースラに、なのはの声が響いた。

「な…なのは？」

ユーノは首を傾げた。

「ユ、ユユユユーノ殿!?!」

「嘘!?!人間だったの!!」

なのは、幸村、佐助はユーノの正体に動揺を隠せなかった。

「そんなに驚く事か？ウチのい…狼も人の姿に変身してたじゃねーか」

政宗は冷静に言う。

「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙ってた元親が言った。

「えっと…なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「ち…違う違う!最初からフェレットだったよー!」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

「ああっ！」

そして思い出した。

「そ…そういえば、この姿まだ見せてなかった」

「だ…だよな？ビックリした〜！」

なのはは大きく息を吐いた。

「あれ？ちよつと待って！そういえば…」

佐助も何か思い出した。

「ユーノ君。君は確か海鳴温泉に行った時、フェレット姿で、なのはちゃん達と一緒に温泉に入ったよね？」

「あつ！」

佐助に言われてユーノは声を上げた。

「……………！！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

「いや…違うんだ、なのは！あれは……………」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

「おい」

小十郎が声をかけた。

「じゃあテメエは何だ？動物の姿なのをいい事に、女湯に入ったのか！？」

小十郎は、軽蔑の眼差しでユーノを見つめた。

「いえ…その……………」

ユーノは、政宗と佐助に視線を向けた。

二人とも、目を細めて小十郎と同じく軽蔑の眼差しで見つめてる。

今度は元親を見た。しかし元親も同じように冷たい視線をユーノに向けている。

「テメエがそんなガキとはな」

小十郎は、見下すようにユーノを見つめた。

「Fuck off pervert! このエロガキ!」

政宗が冷たい目でユーノに言った。

「しばらく話かけないで、変態がうつるから…」

佐助はため息混じりに言っつて、なのはをユーノから引き離れた。

「いや違つんです! 僕はそんなつもりじゃ…」

もはや、この場にユーノの味方はいなかった。

ユーノが絶望した時。

「ユーノ殿…」

「幸村さん!」

幸村がユーノの前に立った。

ああ、僕にも味方がいた。ユーノがそう思った時。

「は、は、ははは…」

「???」

幸村の様子がおかしいとユーノが思った瞬間

「破廉恥でござあああるううううう!!!」

ドガアアン

「ぐふつつつつ!!」

幸村は顔を赤らめながらユーノをおもいつきり殴り飛ばした。

「破廉恥でござるユーノ殿!!! 某がその腐った心をたたき直すでござるうう!!」

「さるうう!!」

そういつて幸村がユーノをボコボコに殴り始めた。

「ぎゃああああ!!」

ユーノの悲鳴が、アースラの中に響き渡った。

幸村以外の武将となのはとクロノは、静かにその光景を見守る事し

かできなかつた。

「艦長。来てもらいました」

政宗達は艦長がいる部屋に到着した。

中に入って、政宗達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

何この妙な和風空間？と政宗達は思った。

畳の上には、艦長のリンディが正座していた。

「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

笑顔でリンディが言った。ふとリンディはユーノの姿を見た。

ユーノは服はポロポロで、顔や腕、足には青アザが出来ていた。

「えっと…君は何かあったのかな…？」

戸惑いながらリンディは尋ねた。

「……いえ……何もありません……」

力無くユーノは答えた。

ユーノの答にリンディは苦笑いをした。とりあえず政宗達は畳の上に座った。

「どうぞ」

政宗達の前に、お茶と羊羹ようかんが差し出された。

「おお！！かたじけない」

幸村や、なのはが礼を言った。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

「…それで僕が回収しようと…」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある!」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

「あの、『ロストロギア』って何なんですか?」

なのはがリンディ達に尋ねた。

政宗達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どこるか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

「あつ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリンディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

「リンディ殿、この世界の人間は茶をそのように飲むのでござるか？」

幸村がリンディにそう質問すると、

「ええ、幸村さんもどうです？」

「では、早速……」

「ちよつ旦那！そんな飲み方ないから！」

佐助が全力で幸村を止めた。

「まったく……どうした小十郎？」

政宗の隣で体をブルブルと体を揺らしている小十郎がいた。

「おい……リンディとやら……」

「はい？」

リンディが返事をする小十郎が、

「何だその飲み方は……！」

怒りの形相で小十郎が叫び、立ち上がった。

「あんた正気か？茶に砂糖だと！馬鹿にしてんのか！あああ」

小十郎がリンディに指をさしながら怒鳴った。

「落ちて着け小十郎、気持ちかわかるが……」

「だったら！俺の目の前で茶に砂糖入れない事それだったら許す！」

「おいお前！艦長になんて口を……」

クロノが止めようとする……

「おい！だったら飲めんのかこれをお前が！」

「そ……それは……」

小十郎にいわれ、黙ってしまふクロノ。すると、

「……わかりました」

「えっ！！艦長……」

「これからは……砂糖を止めます……」

「そうだ！それでいい」

小十郎が納得したと思いきや、

「これからは角砂糖にします！」

「……同じだろうが……！！」

奥州の二人のツツコミがアースラの艦内に響き渡ったという。

「おいおい西海の旦那『ゴニョゴニョ』」

「何だ真田の忍び『ゴニョゴニョ』」

佐助は隣に座っている元親に話しかけた。

「なんつゝ飲み方してんのあの人『ゴニョゴニョ』」

そう今でもリンディは小十郎の反対を押し切って砂糖茶を飲んでい
る。

「ああ、あれ。独特な飲み方だつてクロノのガキが言っていたが、
どうせ年いつてるから味覚が…」

元親が話していたその時、

ズキユウウウウウ

突然佐助と元親の間に羊羹を刺す物がものすごい速さで壁に突き刺
さった。

「そちらのお二人、何か言いました ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

もの凄い殺気立っているリンディが笑顔で言った。

「すみませんでした~~~~~」

元親と佐助が涙を流しながら土下座した。

「…悪魔だ…」

「リンディ殿の後ろに鬼が一瞬写ったような気がするでござるが…」

「大丈夫だ幸村…俺もハツキリ見えたから」

年齢関係の事に関して怒らせると怖いと思っただ竜虎の二人でした。

リンデイが茶を飲み終わり、コホン、と小さく咳をする。

「これよりロストログリア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ!？」

リンデイの言葉に、なのはとユーノは戸惑った。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。幸村達も、うんうんと頷く。

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

小十郎と佐助は、リンディの言葉に目を細めた。

「ちょっと待て」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、小十郎が口を開いた。

「何かしら？」

リンディが小十郎に顔を向けた。

「何で考える時間なんて与える？関係の無い者を巻き込むつもりが無いなら、そんなもん、必要無いだろ」

幸村もハツとなった。確かにそうだ。本当に事件から手を引かせようと考えているなら、話し合う時間など必要無い。なのに何でリンディさんはあんな事を言ったのか。

「まっ、あんたらの考えてる事は大体読めてるがな」

佐助が腕を組みながら言った。

「大方、なのはちゃんの方から協力を申し出るように誘導して、足りない人員を補強しようって魂胆だろ？」

佐助の鋭い眼がリンディを射抜く。

いや、佐助、小十郎だけではなく元親、政宗、そして気づいた幸村も眼を鋭くしている。武将達全員もリンディの考えに気付いていたようだ。

「……………」

リンディは無言で表情を険しくした。

「本当ですか艦長！？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

「そんな姑息な手使わないで、堂々と二人に頼んだらどうだ？そして俺様達も余計な口は挟まねえ。決めるのは本人だからな」

そう言つて、佐助は腕を組んで目を閉じた。

「リンディ殿！立场上、あなたの方からは殿のような者に協力を頼めないのはわかるでござる。だが、だからと言ってこのよう

な手段でなのは殿とユーノ殿を巻き込む事を、我らは断じて認めることはできぬ！」

幸村がリンディに言った。

しばらく場が沈黙に包まれた。

「あ…あの…！」

なのはが沈黙を破った。

「私にお手伝いさせてください！」

全員が、なのはへ振り向いた。

「その…リンディさんに言われなくても…きっと私、自分から頼んでいたと思います」

「し…しかし…！」

なのはの言葉にクロノが戸惑う。

「お願いします！」

立ち上がった、なのはは頭を下げた。

「ぼ、僕もお願いします！」

ユーノも立ち上がって頭を下げた。

「だ…とよ艦長殿」

政宗が笑みを浮かべて言った。

「俺もあなたのやり方は気に入らねえ。だがコイツらは、あなたに言われたからじゃなく、本当に自分の意志で手伝うと言ってる」

政宗は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも政宗の視線を受け止めてる。

「……わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長！？本気ですか！？」

「二人の善意を利用してしようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語った。

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用してしようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

「い…いえ…そんな…」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしく願います」

「は…はい！よろしく願います！」

「お願いします！」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい！」

「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

「…はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。

なのはとユーノ、クロノが部屋から出ていった。

リンディは政宗達に顔を向けた。

「あなた達はどうしますか？」

「あ？俺達か？」

政宗はお茶を飲み干した。

「俺達も協力させてもらうぜ。あいつらだけじゃ心配だからな」

「なのは殿が協力すると申した今、拙者も協力するでござる！」

はそれぞれリンディに答えた。

「わかりました。あなた方もこれからよろしく願います。それと…先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を政宗達にも謝った。

「まあ…アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもしれん」

小十郎が言った後、佐助が立ち上がった。

「それよりも腹が減ったよ…そろそろ飯にしません」

「そうだな」

佐助の言葉で、全員が立ち上がった。

「それじゃあ食堂へ案内します」

リンディが先頭に立って政宗達を案内した。

(…フェイトとアルフのやつ…大丈夫だろうな?)

二人の事を思いながら、政宗はリンディの後を歩いた。

遠見市のマンション。

フェイトはソファアームに座って、アルフはフェイトの前に座ってる。

「ごめんよフェイト…あたし…政宗と小十郎を置いてきちゃったよ……」

アルフは今にも泣きそうな顔をしていた。

政宗と小十郎に逃げる、と言われたとはいえ、二人を置いてきた事は辛かったようだ。

「大丈夫だよアルフ。政宗と小十郎は次元漂流者だから、管理局は保護してくれるよ」

安心させるようにフェイトが言う。

「…ねえフェイト…もう止めようよ…」

アルフはフェイトに詰め寄った。

「本気で捜査されたら…此処だつていずればバレちゃうよ」

「…でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは…!」

アルフが声を荒げる。

「フェイトには幸せになつてほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃって
いるんだね…ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなか
った。

「なら…約束して…あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に
頑張るつて！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ…」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

（政宗…）

フェイトの表情が少し暗くなった。

（ごめんね政宗、小十郎さん…無理しないつて約束…破るかもしれ
ない）

もう、政宗と小十郎とアルフの騒がしい会話も聞けない。小十郎の
手料理も食べれない。政宗と一緒に寝れない。

無愛想だけど、いつも私達を心配してくれた政宗と小十郎。

フェイトの目から一筋の涙が流れた。

（あれ…？もう泣かないつて…決めただけなのに…）

アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていな
い。

（政宗…）

政宗の事を考えると、胸が苦しくなる。

（…会いたいよ…政宗…）

フェイトは、アルフに気付かれないように、そつと涙を拭いた。

第十五章 時空管理局との接触（後書き）

作者

「いや〜約一ヶ月ぶりの更新だ〜」

政・小

「どりやあああああ!!」

作者

「ギヤアアアアアア!!」

・
・
・
・
・

作者

「ゼエ・・・ゼエ・・・」

政宗

「もう一発くらうか？」

作者

「ちょっと待って！更新が遅くなったのは謝るから」

政宗

「そういう問題かテメエ！」

小十郎

「何であっちの作品ばかり更新させてんだと聞いている」

作者

「そ、それは・・・」

佐助

「どうせあっちの作品の続きを書きたいからでしょ？」

作者

「ギクッ!!」

政・小

「ふざけるな〜!!」

作者

「ギヤアアアア!!またああ!!」

・
・
・

元親

「俺の紹介は無しかよ…」

次回 『前触れ』

お楽しみに〜

第十六章 前触れ（前書き）

Minosawa

「お久しぶりの更新…」

政宗

「クソ作者——————」

Minosawa

「へブシ！」

政宗

「散々ほったらかしにしやがって…覚悟はいいよな…」

Minosawa

「しめんなさい…」

第十六章 前触れ

食堂

幸村

「うぬゝ元親殿もこの世界に？」

元親

「ああ・・・お宝の中にな、赤い綺麗な石を拾ったらな、いつの間にかこのアースラって言うこの船の中にいたって訳だ。説得するのに一苦労だったぜ」

佐助

「あちゃゝ大変だね」

政宗

「まったくだ」

武将達はアースラの食堂で食事をしている。

小十郎

「しかし…協力とは言ってもあつちは俺達をどうするか…」
クロノ

「話の途中ですがお二人に質問があるのですが？」

クロノが政宗と小十郎の後ろに立っていた。

政宗

「何だよ？失望官クロ坊君？」

クロノ

「誰が失望官だ！執務官だ！！それにクロ坊じゃない！クロノだ！いい加減覚える！」

小十郎

「わかった…早くしろ…飯食ってんだ…」

クロノが、コホンと咳をする。

クロノ

「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で政宗に尋ねるクロノ。
だが、政宗は。

政宗

「小十郎、醤油取ってくれ」

小十郎

「どうぞ…」

クロノ

「人の話を聞けエエエ!!」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

政宗

「へいへい。アイツの目的ね」

クロノ

「ちゃんと聞いてたのか!？」

クロノは肩で息をしている。

政宗

「おいおい…もうバテたのか？」

小十郎

「だらしないな…まったく…」

クロノ

「聞かれた質問にだけ答えろ!!」

佐助

「クロノ君！落ち着け！完全に二人の流れだよ！」

佐助がクロノを落ち着かせる。

政宗

「Questionの答ね。目的はわかんねーよ。ちなみにアイツは、ある人物に言われてジュエルシード集めしてるだけだ」

クロノ

「それは一体誰なんだ？」

政宗

「……さあな。俺もそこまではわからねえ」

小十郎

「同じだ……」

クロノ

「本当か？」

クロノは疑いの目を政宗に向ける。

政宗

「信じる信じねえは、Youの自由だ」

互いに睨み合う。

先に視線を外したのはクロノだった。

クロノ

「…これ以上聞いても、何も言わないようだな」

クロノはため息をついた。

クロノはため息をついた。

クロノ

「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

政宗

「OK……」

政宗は軽く返事をし、クロノは食堂を去っていった。

*

翌日。

アースラの会議室。

局員達が椅子に座ってる。

その中には政宗、小十郎、幸村、佐助、元親、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これからの事について説明している。

リンディ

「……というわけで本日をもって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

リンディ

「また、今回は特例として問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

リンディがユーノを見る。

ユーノ

「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

リンディ

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

なのは

「た…高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

小十郎

「政宗様」

小十郎が小声で自己紹介をするように促した。

「Ah?しょうがねーな」

メンドくさそーに政宗は立ち上がった。

政宗

「俺は奥州筆頭 伊達政宗だ！」

小十郎

「俺は政宗様の右目、片倉小十郎だ……」

二人は緊張した様子もなく、堂々と胸を張って答えた。

幸村

「某は真田幸村と申す！以後！お見知りおきを！！」

幸村は吼えるかのように大きな声で自己紹介した。

佐助

「ちょ！旦那！いくらなんでも場を考えて、あつ！俺は猿飛佐助、忍者で〜す……」

周りの局員達は、呆れた顔で政宗達を見ていた。

リンデイ

「え……えつと……彼らが臨時局員となって事態にあたってくれます
なのは

「よろしくお願いします！」

なのは、ユーノが頭を下げてあいさつする。

*

遺跡。

フェイトとアルフがいた。

アルフ

「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」

フェイト

「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

アルフ

「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」

フェイト

「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

（政宗…今頃どうしてるかな？）

*

時の庭園。

プレシアは一人王座に座っていた。

プレシア

（フェイト……今頃、私のためにジュエルシードを集めてるのかしら……）

プレシアは考えた。

プレシア

（伊達政宗…あの男の言葉を聞いてから…何故かフェイトの事を考えるようになってたわ……）

政宗に言われた言葉を思い出す。

プレシア

「ああ…そうか……」

プレシアは気付いた。

プレシア

「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない

……こんな事に今まで気付かなかったなんて……」

プレシアはため息をついた。

プレシア

「アリシアもフェイトも私の娘。私は二人の母親」

ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

プレシア

「伊達政宗…魔法も使えないただの人間が、この大魔導師に向かってあんな事を言うなんて……いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑った。

プレシア

「…自分の大切なものを…自分で傷つけていたなんて……」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しずつ暗くなっていった。

プレシア

「何故……」

手が震える。

プレシア

「何故……やっとな大切なものに気付いたのに……」
目には涙が浮かぶ。

プレシア

「私は死に近づいていくの？」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。フェイトが大事だって気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆った。

プレシア

「……フェイト……」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

*

クロノとオペレーターのエイミー・リミエッタがフェイトについて調べていた。

クロノ

「フェイト・テストロツサ。かつての大魔導師と同じファミリーームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

エイミー

「じゃあ、その関係者かな？」

クロノ

「わからない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがああるかもしれない」

*

政宗達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。
一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

政宗達は食堂にいた。

佐助

「なあ竜の旦那？」

政宗

「何だ？」

佐助

「フェイトちゃんの事なんですけど…本当に管理局に保護を頼まなくていいの？」

佐助は、前から思ってた事を口にした。

公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護ったのだ。政宗なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

政宗

「今、アイツらを管理局に保護してもらっても、何の解決にもならねえんだよ」

白飯をを食べながら政宗は答えた。その顔は険しかった。

元親

「何かワケありか？独眼竜」

元親が政宗に尋ねた。

政宗

「ああ。まあな」

政宗は、茶碗と箸をテーブルに置いた。

政宗

「アイツはよお。ガキのくせに一人で何でも背負おうとして、無茶ばっかする厄介なヤツなんだよ」
そう言っつて政宗は頬杖をついた。

なのは

「…政宗さん」

政宗

「ん？」

唐突に、なのはが政宗に話し掛けた。

なのは

「私もね。小さい頃はよく一人だったんだ」

政宗

「…そうなのか？」

幸村

「何と!？」

政宗は頬杖を解いて、幸村は驚いて話を聞く。周りの皆も黙って話を聞いている。

なのは

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのはは話を続ける。

なのは

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃん

やお母さんもずっと忙しくて

政宗

「……………」

なのは話を、政宗は黙って聞いている。

話をしている時の、なのは顔は少し寂しい表情をしていた。

なのは

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で…………だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言っつて、なのはは笑顔を作った。

なのは

「政宗さん」

政宗

「ん？」

なのは

「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

政宗

「……………」

政宗は黙って、なのはの答を待つ。

なのは

「同じ気持ちに分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分こにできる事だと思っつんです」

なのはが答を言う。

幸村

「うおおお——なのは殿にそんな過去が————————」

幸村は号泣しながら大声で言った。

佐助

「旦那！！そんなに泣かない！」

幸村

「しかし…しかし…」

なのは

「幸村さん…」

なのはは苦笑いした。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

第十六章 前触れ（後書き）

次回、BASARA一同がブチギレます

第十七章 怒りと叫び（前書き）

久しぶりの更新です。

それではどうぞ…

第十七章 怒りと叫び

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

フェイト

「アルタス、クルタス、エイギアス…」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

アルフ

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違っていないけど…）
アルフの表情が険しくなる。

フェイト

「はぁぁぁあ！！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

フェイト

「見つけた…残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

アルフ

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて……いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、二人の男を思い浮かべた。

アルフ

（政宗……小十郎……あんたらなら……フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

フェイト

「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

フェイト

「空間結界とサポートお願い！」

アルフ

「あ……ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

アルフ

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！政宗と小十郎は体を張ってフェイトを護ったじゃないか！だったら！）

アルフは決意を固めた眼をする。

アルフ

（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。

フェイト

「いくよバルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

緊急事態のアラームを聞いた政宗達は、ブリッジに入った。
政宗達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

政宗

「フェイト！」

なのは

「フェイトちゃん！」

政宗となのはが、フェイトの名を叫んだ。

リンディ

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った。

クロノ

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、政宗は眉をひそ顰めた。

クロノ

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

なのは

「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

クロノ

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

なのは
「!?!」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

なのはだけでなく幸村と佐助も驚いている。政宗と小十郎と元親の三人は、表情を険しくした。

クロノ

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

なのは

「でも…」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

クロノ

「今のうちに捕獲の準備を」

オペレーター

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

リンディ

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンデイが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。

画面を見上げていた政宗が口を開いた。

政宗

「最善の選択？ Select the lowestの間違いだろ」

小十郎

「いえ…弱虫の戯言では…」

クロノ

「何だと!？」

クロノは、振り返って政宗と小十郎を睨んだ。

政宗

「どつやらお前らの言つ正義はこんなもんとはな、腐ってんぜ？お前ら…」

小十郎

「見かけは大きく、中身はこんなにも弱腰の連中ばかりとは…呆れるものだ…」

クロノ

「貴様ら…!口を慎め!!」

クロノが政宗に向かって叫んだ。

直後、政宗の眼がカツと見開かれた。

政宗

「目の前で苦しんでるヤツらを救おうともしねーで、世界を管理するなんてBigな事吐かしてんじゃねエエエ！ー！！」

政宗の怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンディだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

幸村

「同感でござるー！」

今度は幸村が前に立った。

幸村

「世界とかを救う前に、目の前で必死に戦ってる女子を救うのが先決でござるー！」

幸村が言い終わった後、佐助も幸村の横に立った。

佐助

「苦しんでる女の子を見捨てるなんて、あんた等薄情者だねー見てホントに腹が立つんだよー！！」

佐助がリンディ達に向かって怒鳴った。元親も前に立った。

元親

「俺も…海賊やら鬼やら言われるけどな…俺は決して仲間を見捨てず、なおかつ村の人間も守り抜く！…あんたらにはそれがねえのか？」

「リンディさん！」

なのはの声がブリッジに響いた。

なのは

「私…フェイトちゃんを助けたいです…！」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはが言った。その瞳には、強い決意が宿っていた。

リンディ

「……………わかりました。行動を許可します」

クロノ

「艦長!?!」

リンディの言葉に、クロノは驚いた。

なのは

「ありがとうございます…！」

ユーノ

「急ごう、なのは…！」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

その時、

政宗

「なのは」

政宗が、なのはを呼び止めた。

なのは

「は、はい」

なのはは、足を止めて政宗を見た。

政宗

「悪いが今回、俺は力になれねえ。空飛べねーからな」

そう言つて政宗は、なのはに顔を向けた。

政宗

「フェイトを頼んだぞ」

なのは

「はい！」

政宗の言葉に、なのはは力強い声で返事をした。

ユーン

「なのは！早く！」

なのは

「うん！」

なのはが、走り出した時、

政宗

「ああ…それから、なのは」

小十郎

「ちよつといいか？」

政宗と小十郎が、なのはを呼び止めた。

政宗

「一つ、アイツらに伝えてほしい事がある」

小十郎

「俺からもいいか？」

なのは

「え？」

なのはは、首を傾げた。

*

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。それでもジュエルシードを封印しようとした時。

フェイト

「!!!」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

アルフ

「フェイトの邪魔するなアアア!!」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

ユーノ

「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

アルフ

「えっ!?!」

アルフが驚きの声を上げる。

ユーノ

「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

なのは

「フェイトちゃん!!」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

なのは

「二人でジュエルシードを止めよう!!」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていた。

レイジングハート

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

バルディッシュ

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

なのは

「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

なのは

「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

なのは

「ディバインバスター、フルパワー！」

レイジングハート

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

なのは

「せーの！」

なのはが合図する。

フェイト

「サンダー……」

なのは

「デイベイン……」

二人ともデバイスを構える。

フェイト

「レイジー……！！」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

なのは

「バスター……！！」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

*

アースラのブリッジ。

エイミィ

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのエイミィが報告する。

クロノ

「な…なんてデタラメな…！」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

佐助

「こいつぁスゲーや」

画面を見て、佐助が呟いた。

幸村

「ぬおおおお！なのは殿！見事でござる————！！！」

幸村は嬉しさで飛び跳ねてる。

隣にいる政宗は、小さく微笑んだ。

*

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

なのは

「えっと…半分こ…で良いよね？」

フェイト

「……………」

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろうとした。

なのは

「待つてフェイトちゃん！」

なのはは、フェイトを呼び止めた。

フェイトは振り返らずに止まった。

なのは

「政宗さんと小十郎さんが、フェイトちゃんとアルフさんに伝えてほしいって」

フェイト

「えっ!？」

思わずフェイトは振り返った。隣にいるアルフも少し驚いた顔をした。

なのは

「政宗さんが『また無茶したら、二人とも拳骨だ』、小十郎さんは『無茶ばっかするな』って」

フェイト

「……………!」

フェイトは、目を見開いて一瞬肩を震わせた。

アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

なのは

「フェイトちゃん…」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

*

マンションに向かうフェイトとアルフ。

フェイト

（政宗…小十郎さん…私達の事…心配してくれてたんだ……………）
フェイトは、胸に手を当てた。

フェイト

（ありがとう政宗…）

心の中でお礼を言いながら、フェイトはアルフと共にマンションに

戻
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4273n/>

BASARAなのは ~魔法戦国物語~

2011年10月10日10時05分発行